

都留文科大学報

第121号
2013年
3月1日(金)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学内
☎ 0554-43-4341 URL: <http://www.tsuru.ac.jp/>



合唱団が全国大会で金賞受賞



留学生が百人一首を体験



後援会によるお料理教室



夢・希望・勇気 〜ロンドンオリンピック報告会〜

「さよなら文大」退職教員から 2

知識人と大学	後藤道夫教授
楽しみ、苦しみそして忍耐	鎌守信彦教授
都留文科大学国文学科へ	楠元六男教授
地域づくりの現場から学びを重ねた	
都留での15年	千葉立也教授
文大での5年間	村上研一准教授
「大学とは何か」を問い続けることの	
できた職場に感謝	田中夏子教授
「落ち穂拾い」との再会	泉 桂子准教授
八年間ありがとうございました	重富恵子講師

おくることば・旅立つことば 10

初等教育学科	清水雅彦教授	国文学科	阿毛久芳教授
英文学科	三浦幸子准教授	社会学科	渡辺豊博教授
比較文化学科	分田順子教授	大学院	儀部直樹教授
初等教育学科	齊藤寛希	国文学科	田崎彩夏
英文学科	河江 巧	社会学科	浜野秀章
比較文化学科	藤谷拓馬		
文学専攻科	大室陽香		
大学院	国文学専攻	佐藤愛華	
	社会学地域社会研究専攻	小林諒一	
	英語英米文学専攻	小高聖恵	
	比較文化専攻	佐藤由佳	
	臨床教育実践学専攻	村上 萌	

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 22

初等教育学科・国文学科・英文学科
社会学科（現代社会専攻／環境・コミュニティ創造専攻）
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより 36

初等教育学科主催講演会
国文学科主催秋季講演会
英文学科・英文学会共催後期講演会
社会学科・地域社会学会共催講演会
比較文化学科主催講演会
ジェンダー研究プログラム講演会

文大だより 42

公開講座「よみ聞かせから読書の楽しさを」
文大名画座
第1回つる白熱教室 志茂田景樹氏を招いて
卒業演奏会を終えて
卒業制作展を終えて
編集後記 46

さよなら文大 — 8名の教員が退職

今年度で後藤道夫教授（初等教育学科）、鉾守信彦教授（初等教育学科）、楠元六男教授（国文学科）、千葉立也教授（社会学科）、村上研一准教授（社会学科）、田中夏子教授（社会学科）、泉桂子准教授（社会学科）、重富恵子講師（比較文化学科）が惜しまれながら退職となります。ここでは本学の発展のためにご尽力くださった8名の方々に、本学での思い出を語っていただきます。ありがとうございました。

知識人と大学

初等教育学科教授 後藤道夫

「知識人」という言葉には古くさい響きがある。だが、これは必要な言葉だ。専門領域についての十分な知識は当然だが、それだけでは足りない。知識人は、自分が生きる社会について、なんらかの全体像、全体をとらえる「センス」をもち、それを表現し、人々に伝える力をもたなければならない。世の人びとが自分の生活や気分を社会的に位置づけ、自覚し、表現するためには、こうした全体像やそれにかかわるセンスが多かれ少なかれ必要なのである。さらに限定すれば、知識人とは、そうした全体像やセンスを自分なりの方法で形成し、専門を通じて人びとに伝えることを自分のレゾナードルとして自覚している人間のことである。研究者や教員がみな知識人であるわけではない。

ちなみに「自立した市民」とは、こうした全体的な知識やセ

ンスを学習し利用しながら、自分の生活、気分、要求を表現でき、必要があれば調べ、ものを言い、周りに働きかける、そうした精神的な能力と姿勢をもつ人びとのことであろう。

知識人は、自分を表現できて当然だが、それにとどまらず、直接・間接をとわず、他の人びとの生活、気分、必要を知り、それらを全体像とセンスに織り込むことが仕事としてできなければならない。通常の市民とは違う点である。

大学というところは、少なくともこの水準の知識人が多く集い育ち、自立した市民を育成するとともに、少数であっても、知識人になりうる素質と姿勢をもつ若者を陶冶できる場であるべきだろう。だが、本学にかぎらず、多くの大学はそうした場であることをやめようとしている感がある。

大学が知識を商品として切り売りする企業のように変貌しつつあり、加えて、日本の旧来の大学文化を支えてきた後発資本主義型の文化的ラディカリズム、つまり、戦後民主主義がほぼ死に絶え、代わりとなるべきラディカリズムが地歩をしめていないためだろう。ラディカリズムは、



後藤道夫教授

知識人が他の人びとの生活、気分、必要を取り入れる際に、弱者のそれを意識して取り入れるバネとなる。通常は表現されない「細部」や「例外」にこそ、本来の知識人を育てる養分があり、ラディカリズムなしに知識人が育つことはむずかしい。

ここでいう弱者とは、自分の生活、感覚、必要を社会的に位置づけ、自覚し、表現する「力」に欠ける人びとをさす。もとよりこの「力」は、たんなる知的能力のことではない。学習の機会が少ないこと、弱者に使える知識体系がめったに存在しないこと、自分の感覚や必要を表現すると周囲や社会の緊張をよびおこすために、意識的・無意識的にそれを控える習慣が発達する場合が多いこと、表現した要求の実現や軋轢解決のために依頼できる財力や権力に無縁であることなどが、この無「力」を構成する。

大学はラディカリズムを容れ、知識人を育てるべきだ。都留文科大学の健闘を祈る。



社会調査実習 2009年2月
不知火海の海上タクシーにて

「さよなら文大」 退職教員 8 名から

楽しみ、苦しみそして忍耐

初等教育学科教授 鋤守信彦

私は昭和 52 年 4 月に本学へ採用されました。あっという間の 36 年間でした。この間、楽しいことが沢山ありました。また辛いことは、耐え忍ぶ間に時間が解決してくれました。今は、この原稿を書きながら、文大を去ることが非常に辛く悲しく、胸が引き裂かれる思いです。

私の赴任当時、体育の教員は一木、長、中野、水上、飯野先生と私の 6 名でした。現在の体育館の隣にプレハブの大部屋があり、その片隅に机を 6 つ並べて活動していました。その頃は先生方や体育教室の学生と一緒に食事をしたり、のどかでアットホームな生活でした。

私の最初の仕事は、まだ授業が始まる前の 4 月上旬、「初心者水泳講習会」でした。当時は本学にプールがなかったため、甲府のプールを借りて採用試験の為の実習をしていました。ここでは合宿生活を通して学生とも家族同様の生活で、本当に楽しく、今でも当時の学生をはっきり覚えています。先生方は皆親切で、一木先生が野草のてんぷらを作ってくれたり、長先生には車で東京まで送って頂きました。水上先生には年も近いことからよく面倒を見ていただきました。7 時半、新宿発の特急でよくご一緒したもので

す。

当時は私もまだ 20 代、現役で柔道をしていて、合宿、試合等で国内外のあちこちに出かけ、大学には多大なご迷惑をおかけしました。入試の試験監督、委員会などから外していただくなどの我儘を許して頂いたこと、非常に感謝しております。

授業は専ら柔道でした。柔道場は現在の 2 号館の場所にあり、立地条件としては最高でしたが「女学校時代の建物を移築した」といわれていて、とても古い建物でした。雨の日には雨漏りのため、室内に受け皿を置きながらの授業となりました。また、更衣室がなかったので、女性は柔道場内、男性は屋外で着替えをしていました。また、下宿に帰って柔道着に着替え、バイクで来る学生もいました。この授業は通年であったので学生とも仲良くなりました。お弁当をもらったり、車で駅まで送ってもらったり、研究室に花を飾ってもらったりしたこともありました。授業の最後に行った約 15 人対 15 人による出身県別の東西対抗戦では、学生たちも熱が入り喜んでいるようでした。今となってはそれも懐かしい思い出です。

大学には、在任中、ヨーロッパ・アメリカをはじめ、中国・



鋤守信彦教授

韓国・オセアニア・南米のアルゼンチンまで行く機会を与えていただいたことに、特に感謝しております。ニュージーランドで関口先生、サンフランシスコで田中純一先生、ミュンヘンで平野先生、ロンドンでは宗内先生とお会いできたことも良い思い出となりました。

これ以外にも沢山の思い出がありますが、限られたスペースのため書き尽くすことはできません。兎に角、別れは辛いものです。長い間有難うございました。

ビッグベン前にて
2012.8 月ロンドンオリンピック時

「さよなら文大」 退職教員8名から

都留文科大学国文学科へ

国文学科教授 楠元六男

都留文科大学に奉職して、三十四年。いよいよ退職することとなった。

「光陰矢のごとし」というが、まさにしかり。時間の経過は個人の認識力など、はるかにこえた存在であるようだ。

いよいよ退職する段になって、あれやこれやと考えることは多い。

世はこぞって実利をめざし、文学部も就職に有利なメニューを揃えようとしている。そうすることによって、おのれの存在意義を喪失しつつあるのが、現状ではなからうか。基礎学問の根本部分を放棄して、立ち位置を実学の方へスライドさせても、本質的な実学専攻に対抗すべくもなからう。むしろ虚学の虚学たる良さを、発揮できるような方向を、今こそ模索すべき時期ではないのか。

本学は、文学部だけの単科大学である。社会でいうなれば、特定の商品だけを販売する専門店のようなものとして理解できる。

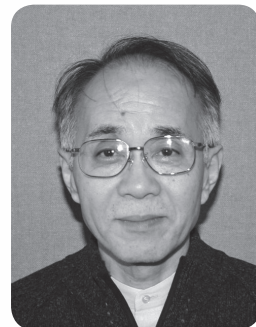
商品の多彩さや量においては、総合的な販売店に抗しようもない。

この零細さは、組織としての弱体を意味している。いきおい就職実績に固執しがちになるが、それはおのれの足元を崩壊させる危険性すら孕んでいる。では就職なんかどうでもよいのかというと、むろんそうではない。

まことに迂遠な方法ながら、専門科目を再編成して、都留文科大学の「国文学」というブランドを構築すべきではないのか。若干のバランスを失してもよい。あそここの部分は秀でていると評価されるような特徴があれば、本学国文学科は十分に「国文学」の世界でめだつ存在になりうる。

いま本質的な議論をかさねて、他大学にない特徴を構築できれば、本学国文学科の将来は明るい。

研究・批評のメソッドをがっちりと検討して、本学らしさを



楠元六男教授

構築するためには、何をすべきなのか。

わたくし個人としては、「国文学」の隣接分野を大切にしてほしいと思っている。書誌学しかり、日本史しかり、漢文学しかり、外国文学しかり。もろもろの分野を想定できるが、総花的に着手するのではなく、ある特定分野に照準を定めて、三十年くらいのスパンで、徹底的に教育してゆく必要があるのだろう。

こうした対策をとらないかぎり、あそここの学生にはこんな特徴があるとの評価を得られないのではないか。

あえていうならば、一二科目を付加する程度の改訂では、何の意味もない。科目の合成そのものから、根本的に検討しなおすような手術を要請してやまないのである。

思えば、本学は右肩あがりの時代に即応して発展してきた。いま不景気や少子化の時代になったからといって、文学部の枠組みを変更するわけにはいかない。ならば、もっとも基本的なところに立ち返って、特色あるメニューと有望な卒業生を世に送りだすことに専心すべきではないのか。

以上が、大学を去るにあたってのわたくしの思いである。



オープンキャンパスにて参加者に説明する筆者

「さよなら文大」 退職教員 8 名から

地域づくりの現場から
学びを重ねた都留での 15 年

社会学科教授 千葉立也

この 3 月で本学を定年退職することになりました。着任から 15 年、前任校での 15 年を合わせると 30 年の、大学専任教員として勤めを終えることになります。教育、研究、大学運営、学会や社会での活動と、専任教員に期待される仕事は中途半端なりに何とか果たそうとしてきました。ここまで辿りつけたのは多くの方々のご助力のお陰と、まず感謝申し上げます。

15 年という半端な期間ではありましたが、地域の実相を現場から学ぶことを掲げ、「地域経済論」の講義と演習を中心に本学での教育に取り組んできました。「地域社会」と比べると「地域経済」には馴染みが少ないようでしたので、「地域づくり」という視点から、地域経済を構想するという方向を模索することになりました。すなわち、グローバル化する市場経済のもとでローカルあるいはコミュニティを持続可能なものとするには、非市場の小さな経済活動をボトムアップでつくり出すことが重要だということです。

残念ながらゼミの人気は今ひとつでしたが、ゼミの学生には 2 回のフィールドワークを経験させ、卒論もフィールドワーク必須というように、フィールド重視を貫いて

きました。現場から学ぶ経験がどこまで実になっているかはわかりませんが、参加者にはのちまでも記憶として残るのではないかと考えています（それは私も同じ。ということで、写真もフィールドワーク実習地で参加学生と撮ったものにしました）。私にとっても、毎年のフィールドワーク論文をまとめた報告書が、本学での教育指導を積み重ねてきたことを示す、かけがえない証となっています。分野は違いますが、大学院で本格的なフィールドワーカーに育っている学生もでてるのは嬉しい限りです。

また、これまでのゼミ生のなかには都留の地域づくり、市民活動に関わる学生もかなりいました。その縁でしょうか、都留市の市民活動推進条例の原案をまとめる策定懇話会に誘われ、委員長として市民の方々と一緒に市民目線からの条例づくりも経験できました。その後も、この条例にもとづく市民活動推進委員会や環境基本条例づくりに関わりました。社会学科の二専攻



千葉立也教授

再編に合わせて設けた新しい科目でも、こうした経験や人脈を活かし、地域の方々に講師として来ていただく、あるいは都留のヤマ、サト、マチを野外教室とする授業が実現できました。都留で生まれた新たな縁がもたらしてくれたと思います。

社会の大きな変化のなかで大学のあり方が問われていますが、変化は一通りではありません。多様な道があるはずです。多様な考えや経験が尊重され、多様な想いと工夫が活かされ、「小さくてもキラリと光る」大学として、都留文科大学がさらに進化、発展していくことを願っています。

フィールドワーク参加のゼミ生と一緒に
(2012 年 9 月、山形県鶴岡市にて)

「さよなら文大」 退職教員 8 名から

文大での 5 年間

社会学科准教授 村上研一



村上研一准教授

私が文大に着任した 2008 年以來の 5 年間を振り返ると、日本と世界の社会・経済は激動期を経てきた。同年秋には「リーマンショック」と言われたアメリカ金融機関の連鎖的破綻が世界的不況につながり、それまで輸出依存の「景気拡大」を遂げていた日本経済は深刻な不況に陥った。同年末から翌年始にかけての「年越し派遣村」に象徴されるように、非正規雇用での就労者を中心に失業と生活不安が広がり、「構造改革」下で形成されてきた格差・貧困が白日の下にさらされた。こうした中、「国民の生活が第一」を掲げた民主党による政権交代が実現したが、首相交代と公約反故を伴う政策の

変質を経て、3 年余りで自民党政権が復活した。金融危機が米国から欧州へと広がり深化している世界の現状、また国内における東日本大震災と原発事故は、成長の中で置き去りにされてきた地域の諸課題とともに、科学技術や経済成長のあり方、人間本来の豊かさ、そして我々の幸福観の見直しを迫り続けている。

こうした時代の激動の中で、自らの専門領域の研究の深化とともに、社会科学の研究者としての存在意義が問い直される 5 年間だったように思われる。内容の詳細は省略するが、経済学・日本経済の諸課題について、より広い視角からの研究の深化をはかる意義を実感させられている。こうした研究の深化に関しては、法学、政治学、歴史学、社会学など専門領域を異にする先生方とフランクに議論できる社会学科に在籍させていただいた影響が大きかったと考えている。今後も、専門領域に蛸壺化するのではなく、他の領域の諸研究に謙虚に学びつつ、自らの研究を深化させていきたい。

厳しい状況下の学生の皆さんへの教育、支援について、どれだけの貢献ができたかについて確たる自信はない。し

かしながら、私が接してきた中でも、少なからぬ学生の皆さんが、勉学環境に恵まれないうち、あるいは確かな将来展望が描けない中にもかかわらず、学ぶ意欲を持って地道に努力していた。こうした人々からは、多くの人々の幸せに貢献しようとする生き方を模索している意欲が感じられ、私自身、反省させられ、また勉強させられた。これからも、自己の栄達や保身のためではなく、信念にしたがって人生を歩んでいってほしいと願っている。また、多くの既存の組織の劣化が指摘されている今日、こうした若い人たちが学び続け、培った力を如何なく発揮されることに期待したい。今後とも、こうした学生を育み、社会に送り出す「知の拠点」としての都留文科大学の一層の発展を祈ります。



2 号館 6 階の研究室より

「さよなら文大」 退職教員 8 名から

「大学とは何か」を問い続けることの
できた職場に感謝

社会学科教授 田中夏子



田中夏子教授

2004 年の着任以来、文大での10年間にわたる教育、研究活動は、私にとって、知的刺激に満ちたものでした。限られた紙面ですので、以下、二つのことを書きとめて退任のご挨拶にかえたいと思います。

一つ目は、日々、試行錯誤してきた環境・コミュニティ創造専攻（以下「環コミ」）での教育活動の手ごたえです。カリキュラム上、地域に出て体験をしたり、調査をしたりするフィールド系授業が多いため、私も学生たちと地域に出かけていって一緒に勉強する場面が格段に増えました。

地域には、私たちの生活に直結する課題（市場志向の改革をもたらす諸問題、地場産業の衰退、人間らしい働き方の破壊、環境問題の深刻化、人々の「生きにくさ」の増大等）とむきあう上で、多くの示唆的な実践が存在しています。そうした実践に触れることは、学習課題として貴重であることはもとより、どんな仕事や暮らしをしていくべきか、「将来設計」を迫られる学生にとって、様々なヒントが存在しています。私自身、地域調査を通じて、研究上の示唆のみならず、自らの生き方、暮らし方に直結する多くのことを学ばせていただきま

した。こうした学びを学生とも分かちあいたいというのが、環コミのカリキュラムに寄せる、担当教員としての願いでした。

私は 2013 年 4 月から、農を軸として里山保全や地域づくりを射程にのこした活動を始めます。これも、環コミを作りながら、私自身がその影響を最も受けた結果かもしれません。

もう一つ、避けて通れないのが法人化問題でした。いわゆる「独法化」前後にかけて、大学の在り方を考え、研究会等も開催して議論する機会を様々な人たちと持てたことにより、それがなければ自覚化することがなかったであろう多くのことについて考えることができました。大学を取り巻く社会的環境の変化に大きく翻弄された思いはありますが、そのたびに「大学とは何か」という問いと向き合うこ

ととなり、その意味では、大学で働くことの手ごたえも感じました。議論を重ねてもなお、相互理解をはかることの難しさがある…その難しさを共有しながら運営していくのが大学で、それが「まどろっこしい」とか「非効率」とされるならば、危機的なことだと痛感しています。

前任校と合わせて通算 20 年にわたる大学での専任教員としての仕事は、ひとまず一段落となりますが、2013 年度以降は非常勤講師として授業担当を続けます。人生で極めて重要な時期である 4 年間で、この大学に託してくれた学生と一緒に、どんな学びの場を作っていけるのか…そんな思いを、これまで以上に強く持って、じっくり授業の構想を練ることができるのは、私にとって大きな喜びです。「農」を軸とした活動と、教育・研究活動とが、どういう化学反応をもたらしてくれるのか、私自身も楽しみにしています。

フィールドワーク 2012 年 9 月
長野県小谷村にて

「さよなら文大」 退職教員 8 名から

「落ち穂拾い」との再会

社会学科准教授 泉 桂子



泉 桂子准教授

私にとってこの6年間を象徴するものは山梨県立美術館に収蔵されているミレーの「落ち穂拾い」です。故郷に戻り文大で奉職した月日はこの絵と本当の意味で「出会う」時間でした。

国公有林の経営展開を研究してきた私にとって、山梨県有林もまた魅力的な研究対象でした。狭い県土の約3分の1が明治末期に成立した県有林であり、全国的にも稀な存在です。山梨県立美術館の建設はちょうど山梨県有林の経営が大きく転換した1972年と符合します。田辺国男県政の下、県有林の伐採面積が大幅に縮小され、県有林が土地貸付に将来を見いだした時期は、山梨県が観光業にシフトしていく時期でもありました。県有林を研究対象としてきた者にとって美術館は象徴的な意味をもつ存在でした。

さて、文大に来て一番楽しみであったことのひとつに週末の農業系サークルの手伝いがあります。「田んぼクラブ」、「大豆生活」など種々の農業系サークルがありますが、ここで私は初めて自ら「落ち穂拾い」をする経験を得ました。小春日の夕暮れ時、きれいに刈り取られ、はざ掛けの終わった田んぼで一本一本稲穂を拾いました。働くというこ

と、勤勉ということ、本当の経済は自然からの恵みを大切にあまさずいただくことにあると身をもって学びました。と同時に「山梨県立美術館にミレーが来たのは農の営みや人々の労働への限りない賛美がその裏にあったのではないか、山梨の美しい風景・現在の豊かさの根本は農の営みにある」と思えるようになりました。

もう一つ、この絵を違った角度から見られるようになった出来事があります。昨年10月、仏国クレモンフェラン大学前教授のクロアゼル氏宅を訪ね、仏国の入会地・共有地の歴史について教授を受けました。その中で氏のご子息が「落ち穂は誰にも属さない、誰が拾ってもよい」とおっしゃったのです。たぶんこれまでの人生で何度も聞いてきたであろうこのルールは、自分で落ち穂を拾い、異境の地でこの言葉を聞いたとき、ストーンと私の心に落ちました。腰をかがめて落ち穂を拾うこと、背の低い女性や子ども、お年寄り向きのこの作業の中に、今研究者達が注目している「コモンズ（総有）」のエッセンスがあり、生きているのでした。や

や乱暴な推論ですが、山梨県有林もまた入会地でありましたし、今もあり続けています。そしてまた農業もお互いの扶助や配慮がなければ成り立たない生業です。「誰にも属さない、誰が取ってもよい」資源の管理と弱者へのまなざしは今もこの地域の課題であり続けています。山梨の歴史と、自らの生活実感と、これまでの勉強が「落ち穂拾い」という絵の上でひとつになった瞬間でした。

最後に、都留文科大学のますますのご発展をお祈り申し上げますとともに、公私ともにお世話になりました関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。6年間ありがとうございました。



楽しかった2009年の稲刈り

「さよなら文大」 退職教員 8 名から

八年間ありがとうございました

比較文化学科講師 重富恵子



重富恵子講師

車窓に垣間見る富士山の美しさに心躍らせながら着任したのは 2005 年春でした。修士に進んだのは 35 歳、教壇に立ったのは 41 歳からと、研究歴、教育歴ともに甚だ浅く未熟な私を採用していただいた本学には、本当に深く感謝しています。採用面接の連絡に際しては、丁度その時期に国際協力機構（JICA）の研修事業にてホンジュラスの医師とともに愛知県の僻地医療現場にはりついていてたところで、担当された福田先生が八方探してくださり連絡通知を受け取ることができました。お世話をおかけいたしました。あれから八年。諸先生方、事務局の皆様にご教養をいただくとともに鳥居先生や大森先生など先輩の先生方には教務のこと、学生のことなどいろいろと助けていただきました。同期の内山先生はじめ近い先生方からは、授業の工夫や研究について多くの刺激をいただきました。日本語科目ご担当の非常勤の先生方にも親しくしていただき、なんとか六人もの人事

をたてることができました。笠原先生や伊香先生の温かい励ましの中で八年勤めることができました。本当にありがとうございました。

多少ではあるにせよ JICA での経験や ODA に関する知見を整理し、開発教育を実践してみたいという思いがもともとありましたので、本学での「地球環境・開発論」や「基礎講読」の科目で持続可能性と開発について開発教育教材を活用しながら授業ができたことは、本当に大きな収穫となりました。ゼミ生たちは、卒論を書き終えた後に更に補足論文を要求するという無理難題にもしっかりと応えてくれました。学生たちからの刺激もまたとても大きなもの

でした。

そんななか、ここ三年ほど JICA の国内支援委員を務めるうちに、発展途上国の農村開発と日本の中山間地域問題との共通性に気付き、日本と比較しながら持続可能な開発についての研究を深める必要があることを強く感じるようになりました。しかし我が身を振り返れば、教育と学務に注力する一方で、ラテンアメリカでの調査研究にはまとまった時間が不可欠であることを理由に、研究を等閑視してきました。不器用さ故とは

いえこれを深く反省し、今後はラテンアメリカ地域研究と持続可能社会構築に向けた研究、実践に邁進する所存です。いずれまた国際協力分野での人材育成へとつなげていけるよう、本学での経験を活かして更に精進してまいります。本当にありがとうございました。



ニュージーランドのオープンサンクチュアリとして有名なティリティリマタンギ島でのフィールドワーク研修。前を歩くのは島固有種の鳥タカヘです。

おくることば・旅立つ言葉

教員から・卒業生から・修了生から

出会いに感謝



初等教育学科教授
清水雅彦

都留の学び舎を巣立つ皆さん、ご卒業おめでとうございます。

文大に入学して今日の日を迎える……。ひょっとしたら思い描いた道とは違った人もいたかもしれません。しかし人生は、まさに不思議な出会いや嬉しいめぐり合わせに包まれていて、自分の知り得なかった可能性に気付かされることがあります。そして悩みながらも、ただただ突き進んできた道があることは他の何にも代え難い自信に繋がります、そこからさらに新たな活力が生れるものと思います。

都留という小さなコミュニティの中で、如何に個を守りながら共生していくか、言い換えれば如何に個を活かしつつ生活するかということは、文大生が抱えるテーマとも言えます。個性がぶつかり合いどう收拾をつけようか悩ませたこと、逆にその涙の分だけ絆が深まったことなど、言い尽くせない程の様々な時の共有は、文大生に「個」を保ちながらも「共」に生きることへの歓びを体感させてくれる、これはまさに都留の特質とも言えるでしょう。私自身、こうした都留文科大学の、また都留の町の持つあたたかい、真摯な空気感にずっと魅了され続け

ています。そしてそれは皆さん一人一人が受けとめ、また深く創り上げてくださったものでもあります。

都留に来てくれてありがとう。素敵な出会いに感謝しています。

以前ある中学校を訪れた際、「喜・努・愛・楽」の大文字が体育館に掲げてありました。生活を潤しドラマを演出する「喜怒哀楽」を、私たちはある程度コントロールしながら人に相対するわけで、それができるようになってはじめて大人と言われるのでしょうか。反面、いつまでも子どものような新鮮な目を持つ

ことが、柔らかな感性を保つ秘訣でもありましょう。時に「怒」することも「哀」しむことも必要なこと。しかしそれを「努」めることや「愛」することに代えていける、そんな大人でありたいと思います。



卒業演奏会を前にしたクリスマスレッスンでの一枚

ささやかな積み重ねを大事にして



国文学科教授
阿毛久芳

国文学科の卒業生の皆さん、卒業、おめでとうございます。大学生活の結実点を迎えられたことを心から喜ぶと思います。2011年3月11日の東日本大震災とその後の原発事故が在学中に起ったこと、このことは皆さんの中から消えずその後の“今”を考える起点になることでしょう。何が信頼でき、何が信頼できないか。そうすることが次第にはっきりしてきています。国文学科で専門を学んだことは、日本語と日本語が創り出す文学世界がいかなるものか、個別に探求するものだったで

しょう。それは狭く特殊であったかもしれませんが。でも言葉や言葉の表現にこだわることは、言葉を発する人の心に迫ることであり、その狭い通路から見えてくる世界は意外にも広いものとなっている、そのことに気づいてほしいと願ってしまいます。

原口統三の『二十歳のエチュード』で描かれ、伝説的な先輩となっていた詩人の清岡卓行は、1969年「アカシヤの大連」で芥川賞を受賞しましたが、フランス語の大学教師でもありました。「大学の庭で」(『四季のスケッチ』)という詩に、「つまり／美しいものにおいて自己を実現すること／そのきびしく結晶されるかたちこそ／学問と呼ばれるわざくれに／きみの魂の血液を／惜しみなくめぐらせることではないのか？／その拠点からきみは さらに／美しいものすべてを眺めることができる。／それはきみの微かな不死だ！」

卒業生におくることば

NO MAN IS
AN ISLAND

英文学科准教授
三浦幸子

Congratulations on your graduation! I hope many of you are full of hopes and aspirations for your future, but at the same time you may have worries and anxieties about starting a new life. To those who graduate this year, I would like to present my message, referring to “No man is an island.”

“No man is an island, entire of itself; every man is a piece of the continent; a part of the main.”

(John Donne, 1624)

This is a short extract from a famous poem written by John Donne, a great metaphysical poet of the 17th century. It is said that he expresses his memories and feelings of his relationships with his friends and relatives. Especially, this line is frequently quoted when people talk about the

significant role culture plays in teaching and learning foreign languages. In a global sense, it can represent our place in life, which means that each of us is important as a member of the world; however useless or unworthy we may feel, everyone contributes to mankind and we matter to each other. In a local sense, it implies people are connected with each other by ‘shared culture’ and in reality we cannot live without being affected by it.

For you, Tsuru University is like a continent in the latter context. Through learning at Tsuru University, you have shared a lot of things: from happiness, joy, enthusiasm to sorrow, bitterness and hardship. Working together, each has contributed to what you have belonged to. Now you are leaving this place to sail the seas to a wider world. I strongly hope that what you have gained and cultivated in Tsuru will give you the wisdom and strength to further develop as a decent and sensible global citizen. Also, I would like you to keep sharing good news to encourage and inspire one another. However, when you start a new life in a new place, you might face

a lot of difficulties because of the different cultures you will meet. Certainly, meeting different people and struggling to get along in unfamiliar situations will help you to develop as a person, but in the process, you may face a lot of hurdles to get over, too. Even after you go your separate ways, I would like you to remember that you are not alone; whenever you are having a hard time or even feel depressed, you will probably not be the only one. This is actually what Donne meant to write in his poem; he was writing this when he was very weak in bed, saying to himself that he was not alone because many others, including his friends, could be in the same situation. Thinking this way, he must have been released from his fears and felt calmer and more comfortable. If you, likewise, think of those you love, including your friends, you will be able to keep going.

This is the beginning of a journey to bigger and better things.

Bon voyage!

と書いています。

自分が抱いた疑問を一途に追求するところ、利害とは無縁なこの作業に学問の基本があり、それによりつかみとったものにおいて有限な己を微かに超えた所に立たせられる。さらに末尾では「きみの恋人の懐かしい個別性の中にしか／人類の温い深みがないように／きみの学問の創造と特殊性の中にしか／世界の美しい真実は／あり

えないはずなのだ。」とある。

出来合いのものに囲まれ、促され、強いられる時勢の中に否応もなく私たちはいるわけですが、だからそれらを振り切ってこうしたい、こうすればもっとよいものになるのではと自発的に考え工夫する作業が、今もっとも必要で贅沢で確かなものに私には思われます。そして「世界の美しい真実」は日常の些事の丁寧な積み重ねの



夏、河口湖の卒論合宿先で

中から光り出すのです。ささやかな積み重ねを大事にしましょう、との一言を皆さんに贈ります。

卒業生におくることば

卒業生におくることば



社会科学教授
渡辺豊博

卒業おめでとうございます。いよいよ、次なる人生の「新たなステージ」への旅立ちですね。今は、期待と不安の複雑な気持ちが交錯し、何となく落ち着かない気分かもしれません。

大学時代は、とにかく多様な経験を通して、喜びや感動、悲しみや苦しみを学び、実社会の厳しい現実や複雑多岐な人間関係、面白さを実感したのではないのでしょうか。

また、専門的な知識の習得や被災地でのボランティア活動、NPO活動への参加、海外研修・旅行、卒業論文に関わる現地調査、職場研修などを体験し、自分の潜在力と可能性を強化してきたと思います。

いよいよ春から大人社会への仲間入りです。多くの皆さんは、自分の専門性や能力、意欲、問題意識を駆使して厳しい現実社会の中で自己責任を前提に、自分の力で稼ぎ、生活を支えていかなければなりません。親や恋人への依存や甘えは、通用せず、自分の意思と判断を武器に困難な局面や事象に挑んでいかなくてはならない「孤独な戦い」が待っています。

そうです、世の中は決して「甘くはない」と認識・自覚しておいた方が、今後、間違いなく経験するであろう落胆や挫折、自己嫌悪などの「負の精神状態」を回避することができます。自

分の心の強靱さや体力を過信したり、自分の能力や判断力に過度な自信を持ったりすることは止めてください。職場での困難や障害に対して、精一杯に挑んでしまうと心身ともに疲れ果て、結果的には、心の行き場がなくなり職場を辞めなくてはなりません。

昨今、3年以内に30%以上の若者が職場を辞めてしまう風潮の中で、とにかく「石の上にも3年・5年」の強い気持ちを貫いてください。困難に直面しても、その困難を消化し、解毒してしまう気分転換の術を身に

つけてください。それはお酒だったり、友だちとのお喋りだったり、ボランティア活動だったり、登山や海外旅行など、日常生活とは違う「異空間」の時間を持ってください。

「頑張り過ぎず、柳に風、流れに棹をささず、死んだ振り」を確固たる心情として、苦しさも辛さも経験知として吸収し、弱者の立場が理解できる公助の意思を持った、魅力的な品格ある大人として成長していきましょう。期待しています。

自立と依存の間で



比較文化学科教授
分田順子

多くの皆さんにとって「卒業」とは、4年間通った本学を巣立ち、社会人として「自立」した生活の第一歩を踏み出すことに違いありません。その自立も、自分を守り育ててくれた親や愛着のある相手、学校などによる保護からの自立や、保護につきものの拘束からの解放を意味するものと思われます。そこで「自立とは、依存先を増やすこと」と聞いたらどうでしょう？これは、私がフェイスブック上で最近出会った熊谷晋一郎さんのことばです。彼は脳性小児まひの障害によって車椅子での生活を送りながら、大学進学をきっかけに一人暮らしをはじめ、医学部卒業後は小児科医として働いてきた人です。この「自立とは

…」は、彼が、失禁した時の介助を誰に頼むかというような、とても切実な問題を一つ一つ解決しながら自立生活を確立してきた中で、到達した思想といってもいいでしょう。

私は、エスニシティ論などの授業で、「人は、家やコミュニティ、民族といった集団に自分の安全を託すことで、庇護者としての他者への依存を余儀なくされる。そして、それが他者の支配を正当化する一方で、不安を生み、その不安のゆえに一層の依存に追い込まれる」と語ってきました。ですから、最初は依存先を増やしてどうするの、大事なのは「倚かからず」（茨木のり子）に生きることでしょう、それが不安から解放された安心と安全につながるはず、特に女性にとっては、と思いました。しかし、熊谷さんの言うように、「人は物であったり人であったり、様々なモノに依存しないと生きてゆけない」のです。それは、高齢期に入って以降の母を見てきての実感ですし、都留で

卒業生におくることば

フレスコ画のように



英文学科教授
儀部直樹

最近僕はフレスコ画に興味を持っています。旧石器時代のラスコーの壁画、ルネッサンス期のミケランジェロ作《最後の審判》は有名ですね。いつか僕は、フレスコ画をテーマにして何か文章を書いてみたいと思っています。そのために、本学の美術の先生からいろいろ教えていただいたり関連する書物（例えば大野彩著『フレスコ画への招待』岩波新書）を読んだりしながら僕はフレスコ画の世界を勉強しています。フレスコ画とは漆喰（モルタル）を壁に塗り、生乾きのうちに水や石灰水で溶かした顔料で描く絵の技法のことです。フレスコとはイ

タリア語で「新鮮な」という意味です。ブオン（真の）・フレスコ画の画家は、石壁か土壁の上に漆喰を塗ります。左官屋さんの仕事です。下塗り壁、中塗り壁を作り、その上に構図や形の細かい下絵を描きます。この下絵の上に描画用の壁（上塗り）を作ります。ここからが勝負です。肝心なのはこの上塗りの漆喰が生乾きであることです。フレスコ画は油絵とは違います。ブオン・フレスコ画の絵描きはその日に自分が描ける分だけの壁画を作ります。これを「ジョルナータの（1日分）の壁」と言うのです。この言葉、カッコいいですね。上塗りが少し引き締まってから絵を描きます。初めのうち顔料はゆっくり定着しますから、それに合わせて絵もゆっくり描きます。漆喰を塗ってから何時間か経過した頃どんな性質があらわれると思います？壁がたくさんの水を欲しがって、

1筆ごとに水と顔料がどんどん壁に吸い込まれすばやく定着していくのです。その時間帯（黄金の時）を過ぎると壁は急に水を欲しがらなくなり顔料も定着しなくなり、その日の仕事が終わります。日々描かれた絵は石灰の壁とともに1日、1週間、1カ月とゆっくり乾燥硬化します。フレスコでは水で溶いた顔料は乾燥すると元の顔料の色に戻るそうです。色の明度も彩度も1番高いところで乾きますから発色は明るく鮮やかです。壁が完全に乾くには何年もかかるそうです。

難しそうですね。失敗はできません。しくじったらジョルナータの壁の漆喰を掻き落として、もう1度やり直すしかありません。絵描きの神経はすり切れてしまいますね。1つの美しいフレスコ画には、途方途轍もない忍耐が注（つ）ぎこまれているのです。なんでそこまでして？画家の忍耐力は作品の色の耐久性で報われるのです。画家が頑張れば作品は万年単位でその美しさを失わないのです。すごいでしょ。大げさな言い方ですが、大学院での研究もそれに近いのではないのでしょうか？ジョルナータの壁の「黄金の時」を見逃さずにみなさんが学び思考したことは、みなさんの内部にどんどん定着していき、その後の人生においてもその輝きが失われることはないでしょう。そんなふうに、これからもみなさんの中に学問のフレスコ画を作っていつてもらいたいと願います。

の暮らしにしても、市場に供給されるモノーコンビニのおにぎりにはじまり電力、帰りの富士急などなど一日中すっかり依存していることも確かです。国と国の関係についても、資源の確保や貿易という面で、相互依存関係を脱することは事実上不可能です。

そこで、熊谷さんは、次のようにつづけます。「障害者は、親や施設など特定の介護者に依存先が限られているのに対し、健常者は、様々な人やモノに依存できるので、何にも依存していないように錯覚している人々だ」と。だから、彼にとっての

自立はまず、親や施設以外に依存できる先を開拓することだったのです。これは皆さんの自立にとっても、意味のある経験だと思いませんか。私は、皆さんにもぜひ、この卒業という機会を、皆さんを不安に陥れて支配する特定の人や場所、考え方への囚われから旅立つ契機に、そしてできるだけ多くの人、場所、考え方と出会い、いくつもの繋がりを築いてゆく契機にしたいと思っています。

旅立つことば 卒業生から

都留文科大学での
4年間初等教育学科4年
齋藤寛希

この都留文科大学での学びはとても充実していた、と感じます。4年間は本当に瞬間に過ぎ、ただ漠然と小学校の先生になりたいと思い入学した私を、大きく成長させてくれました。日々の授業は、これまでの学校生活のような教科の授業などではなく、教師になるための専門的な授業となり、その一つ一つが私にとって新鮮、かつ自分の知識になっていくことが嬉しかったのを覚えています。

4年間で「やっぱり小学校教員として将来働いていきたい!」と強く思わせてくれたものは、3年次の4週間にわたる教育実習で、実際の小学校の教育現場に出て子どもたちと触れ合い、授業を行ったことです。大学で何度も授業案を作り、子どもたちとこのように触れ合いしたい、と臨んだ実習も、現場ではうまくいくものばかりではありませんでした。しかし、周りの先生方から様々なアドバイスを頂く中で、子どもたちにもっとこうしてもらいたい、と考えていくと、授業をこうやりたい、という自分の欲求が生まれ、それが更なる高みへと希求する力となっていったよう

に感じます。子どもたちと一緒に学ぶ楽しさを知り、教員になりたいという思いを高められた実習は、とても貴重な体験になりました。

また学業以外にも、ずっと好きだった音楽にたくさんの時間をかけることができました。私は、芸術系特別推薦入試でこの大学に入学したため、1年次から音楽専攻声楽ゼミで活動してきました。音楽専攻は年2回のコンサート、4年次の最後には卒業演奏会もあります。さらに小学校3年生の頃から続けた吹奏楽を、大学でも4年間やり遂げました。音楽専攻と吹奏楽を通して、日々音楽に触れ合えたこの間に、コンサートやコンクールなど様々な目標に向かい、それぞれの仲間と活動に取り組んだことは良き思い出であり、何よりこれ



吹奏楽部4年生の仲間たち

からの人生の糧となりました。

これから大学を卒業し、社会に羽ばたいていきます。期待と不安で一杯ですが、大学生活で学んだこと、仲間と過ごした確かな日々を胸に、自信と誇りを持ち日々過ごしていきたいと思います。

私をいつも見守り、支えてくださった先生方、仲間たち、そして家族に心から感謝しています。4年間ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。

4年間の出会いと歩み

国文学科4年
田崎彩夏

都留文科大学に入学してからもう4年も経ったなんて、卒業を迎える今になっても信じられないくらいです。あっという間の4年間でした。故郷から離れた土地で、初めての一人暮らし。何もかも自分で決めてやっていかなければならないという状況に立たされて、入学したての頃はいつ

も寂しさと不安との闘いでした。便覧を必死に眺めて何度も単位を数えながら時間割を組んだことも、いい思い出です。

4年間の中で私が得たものは、なんといっても、友人と思い出です。新入生歓迎委員会に入り、なまり場班のみんなと迎える側に立って企画運営を出来たこと、天文サークルの仲間と寒空の下で肩を寄せ合いながら流星群を観たこと、阿毛ゼミのみんなと文学について熱く語り合えたことや様々な作品との出会い、そして一番私を変えてくれたのは、アカペラサークル☆☆☆

旅立つことば 卒業生から

APORIAに立ち向かう



英文学科 4 年

河江 巧

卒業を目前に控えている今、都留での生活は様々なことに挑戦することができた貴重な時間だったと感じています。地元を離れ、はじめて1人暮らしを経験し、学業だけでなくサークルや学外の活動で培ったものは、一生の財産だと思います。

まず大きな財産は、ゼミで三浦先生のご指導のもと、



2年間学びあった三浦ゼミ
—卒業論文とともに—

の仲間との出会いでした。歌が好きだけれど人前に出るのは恥ずかしい、でも、変わりたい！ステージに立ちたい！という私の夢を叶えられた場所でした。私は同じグループのメンバーより1年遅れて加入しましたが、週3回の練習と、学祭やコンサートやライブを一緒に作り上げていく中で、そんなことを感じさせないくらい仲の良いグループになりました。先輩にお世話になり、可愛い後輩にも恵まれ

仲間から多くの刺激を受け2年間学ぶことができたことです。3年次のゼミでは第二言語習得と英語教育の指導法に関する洋書を読み、指導の基盤となる理論を学びました。洋書を毎週数十ページずつ読んでまとめ、討議するのは決して簡単とは言えませんでした。その分自分の力になったと感じています。また、空き時間に「自主ゼミ」を開き、英語教育に関する書籍、また新聞・雑誌などの記事を読んで意見交換をしたり、授業研究を行ったり、ゼミの仲間と切磋琢磨できたのはたいへん有意義でした。4年次のゼミでは、第二言語テストについて学ぶと同時に、卒業論文に取り組みました。私は、生徒同士が学び合う「協同学習 (Collaborative Learning)」を取り入れた英語授業について分析・考察をしました。文献研究だけでなく、研究会に参加したり、実際に中学校を訪問したり、「協

同学習」実践授業を観察・分析する中で、このアプローチの利点だけでなく、第二言語学習・指導としての問題点にも気づくことができ、自分が今後英語教師として取り組み続けたい課題となりました。

もう1つは、サイクリングサークルの活動に打ち込んだことです。入部のきっかけは単純なものでしたが、自転車に乗りはじめると自分の力のみで旅を進めていくことに達成感や魅力を感じました。特に北海道や九州をまわり、自転車だからこそ出会えた景色・人・感動・ハプニングは一生忘れることができません。

卒業後は地元での生活が始まります。都留を離れるのは正直寂しいですが、この4年間で蓄えた「財産」を糧にし、学び続ける姿勢を忘れないようにしたいと思います。最後に4年間支えてくれた家族、先生方、友人たちに感謝します。ありがとうございました。

たことをとても嬉しく思います。大学で自分を解放できたのは、☆☆☆のみんなと出会えたからです。あの時、勇気を出して「アカペラやりたいです！」と言って、本当に良かったと心から思います。

先生方も学生も、ここには色々な人が集まります。言葉や文化の違い、考え方の違い、経験の違い、出会った人たちはみんなバラバラでした。授業・サークル活動・行事・友人とのお喋りなどを通じてそ

の違いに触れて、今度は自分に立ち返ってみる。さあ、私はどういう生き方をしていこう。4年間で触れたもの全てが、今の、そしてこれからの私を支えてくれます。今までありがとうございました。



ポンカンのみんなと☆梨ペラ

旅立つことば 卒業生から

次のステップへ



社会学科

現代社会専攻4年

浜野秀章

私は2013年3月で4年間通った都留文科大学を卒業する。自分にとっての大学生活を振り返ると「新しい世界への挑戦」であったと実感する。親から離れての1人暮らし、自分の興味のある教育や哲学、経済などの学問への熱中、サークルや部活の友との飲み会や食事会での団欒に加え学校では学べない社会勉強など、不安と期待、そして楽しみが入り混じった時間であった。そこでは、自分を中心に生活が進み、自分の思い通りの生活を送ることができる。大学が「人生の猶予期」と呼ばれる理由も3年生の就職活動などで忙しくなるころに実感させられた。大学では、だらしない生活を送ることも、有意義な生活を送ることもできる。どの生活が良いかは個人によって異なるため一概には言えないが、全ては自分次第であり、厳しいようだが自己責任である。

私個人としては、入学から現在までの大学生活を通して身につけたい能力が1つあった。その能力とは「コミュニケーション能力」である。私自身、人と接することは好きだが、得意ではなかった。よって、大学ではより多くの、特

に自分とは異なる人と接することを心がけ、時には大学を越えて、バイトやセミナーを利用してまず場数を踏むことにした。結果として、たくさん失敗し、様々な経験をした。そして現在でも、未だに「コミュニケーション能力」がどう変わったか、果たしてコミュニケーション能力とは、などの疑問は残るものの、入学前より少しは変わったのかな～と感じている自分がいる。

大学とは小～高校までのように全てお膳立てはしてくれない。自分から動かないとただ必要最低限のことしか知れず、得られない。これも大学の特徴であると私は考える。時間は長いようで短

い。なぜなら、大学生活の半分は休みだから。私自身、よく考えすぎてしまう傾向にあるが、「まずは行動！そして悔いのない選択を！！」。大学生活を通してこの2つの言葉をずっと自分に言い聞かせてきた。これまで私の言ったこと全てが正しいとは限らない。ただ、これから大学生活を送る人、また現在送っている人に少しでも役立てばと思う。「悔いのない人生を！」。



写真部でのハロウィン

旅立つことば



社会学科

環境・コミュニティ

創造専攻4年

岡森香央梨

桜の花が待ち遠しい今日の頃、大学生活を終え卒業することとなりました。この4年間は私を成長させてくれた大切な日々の連続でした。

渡辺豊博先生のご指導のもと、実際に英国へ訪れたことも私にとって素晴らしい経験のひとつです。中でも印象的だったのは英国のナショナルトラスト運動でした。これは地域住民が参加し、環境保全活動を実践することで人と人

との繋がりを密にし、高齢者や障害者等様々な問題を抱えている人々を結びつけ、社会が抱える問題の解決に繋げようとする運動です。私は、実際に英国へ行き、直接話を聞き体験することで、私の身の周りにも数多く混在する問題と結びつけて考えることができたと思います。それと同時にたくさんの世代の方や様々な人種の方と話すことで多様な角度から物事を考えることの大切さを学びました。

新しいことを始めるときや不安なことを前にしたとき、最初の一步を躊躇してしまうことが誰にでもあると思います。しかし今、私は英国へ行くことと決めた時のように、勇気を持ってその一步を踏み出す

旅立つことば 卒業生から

つながる、つなげる



比較文化学科 4 年
藤谷拓馬

屋久島の山には四六時中雨が降っています。花崗岩でできた土のないこの島では、雨がいくら激しく降ろうとも 3 日とたてば海へ流れ出てしまいます。苔が雨を吸い、苔の水分を木が吸うことで森は生長してきました。島は丸ごとで生命の循環を表現しています。詩人山尾三省さんは、樹齢千年を越える島の杉を「聖老人」と呼びました。木の中に霊が住み、山の中に神が住

ことが、新しい出会いや喜びに出会うことに繋がると確信しています。私の大学生活は、その小さな一歩ひとつひとつの積み重ねであったと感じています。今の私があるのは、暖かく見守り、時には厳しくご指導頂き、共に時間を過ごしてくださった多くの方々のおかげであり、感謝の想いが溢れるばかりです。

この 4 年間、苦しいこと



英国グラウンドワークにて

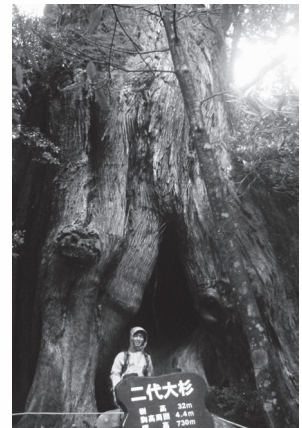
む。人間の小ささを感じざるを得ない場所が確かにあります。

私が屋久島に行ったのは 2010 年の夏でした。その時から自分にとって、人間にとって自然や生命とは何かということを考えるようになりました。自分の生活を振り返ってみても、他の命に寄り添う生き方では決してありません。普段食べているものには沢山の薬品が使われていて、排泄物は処理場で重油が使われて灰になっています。

3 年生の時、カリフォルニア大学へ 10 か月間、留学するチャンスを得ました。そこで私は、ネイティブアメリカン研究の授業をとりました。ネイティブアメリカンの教授

や悔しく思うことはたくさんありました。しかし精一杯努力すること、自分が決めたことに対して一生懸命取り組むことで、少しずつですが着実に前へ進むことができ、それを認めてくれる人は必ずいました。そして苦しさや辛さの比較にならない位、多くの喜びや笑顔に溢れた毎日を過ごすことができました。

卒業後、運よく私が就職活動を通して最も心を奪われた企業の一員として働くことができます。私を成長させて頂いた多くの方々に誇れるよう、自分の信じた道を歩んでいこうと思います。本当にありがとうございました。



屋久島の木の下で

による、彼らの歴史、生活、宗教などについての授業は刺激的でした。自然に対して敬意を払い、伝統を守ってきた先住民たちの文化や土地が奪われてしまったことに憤りを感じました。授業中に女性の教授がホワイセージを焚いたことがあります。その香ばしい匂いをかぎながら、自分には守るべき伝統があるのだろうかと自問しました。

私は日本の農村で生きたい、生命の輪の中で生きていたいと思うようになりました。比文の授業で日本のことを学んだこと、ボランティアで東北の人々に触れたことなども重なり、この思いが芽生えました。まずは自然のそばで生き、自分の伝統を探すことを始めたいと思います。私たちの世代が日本の自然と伝統を次の世代へと繋いでいかなければならないと考えています。

あっという間に過ぎてしまった 4 年間は、私の中でかけがえのないものになりました。友人、先生方、都留という環境に感謝がつきません。ありがとうございました。

旅立つことば 専攻科・修了生から

仲間と出会い
充実した1年

文学専攻科
教育学専攻
大室陽香

私は学部生時代の4年間は社会学科に所属し、大学入学当初は中学校社会科の教師を目指していました。一方で初等教育の方にも興味があり、副免で小学校の免許も取得しようと初等教育学科の授業にも参加する中で、次第に小学校教師への思いが強まりました。目標を小学校教師に切り替えて勉強を始めたのですが、同時に初等教育を専門に学んできた人たちと比べて勉強不足を感じ、このまま学校現場に出ることに大きな不安を抱きました。また、病気が見つかったり、追い打ちをかけるように帰省中の福島で被災したり、様々な困難にも見舞われました。心に余裕がないこともあり、4年次での教員採用試験の受験は断念し、もう1年きちんと勉強して、翌年こそは自信を持って学校現場に出ていきたい。



4月、大学周辺でのお花見

その思いで専攻科への進学を決意しました。

専攻科での1年間は、前期が教員採用試験、後期は研究論文が主となりましたが、定員が10名程度と少人数のうえ授業のほとんどがゼミ形式であることから、大変中身の濃いものでした。全員が教師を志しているため、それぞれが教育について真剣に考え、また、教育への情熱と学ぶ意欲にあふれる仲間たちと意見を交換し合うことにより、お互いがよい刺激を受けながら学びを深めることができました。それだけでなく、勉強で行き詰った時や悩みを抱えて苦しんでいた時、研究論文で困っていた時、専攻科の仲間たちが相談に乗ってく

れ、自分のことのように一緒に悩み、考え、励ましてくれました。そんな仲間たちにどれだけ助けられたか分かりません。4月から始まる小学校教師としての新しい生活に不安はありますが、専攻科で学びを深め、これから先も教育について語り合える仲間がいるということが、現場へ踏み出す勇気となっています。

最後になりましたが、多くのことを教えてくださった先生方、専攻科の仲間たち、大学生活を応援し見守ってくれた家族、これまで支えてくださった大勢の方々に心から感謝しています。ありがとうございました。

都留での
素晴らしい日々

国文学専攻
佐藤愛華

6年前、岩手で生まれ育った私は、見知らぬ土地での生活に期待と不安を抱えながら、都留文科大学に入学しました。入学当初こそ、知り合いもおらず、慣れない生活に戸惑いましたが、しだいに友だちもでき、落ちついた都留の環境の中で、充実した大学生活と大学院生活を送ることができました。

大学院で過ごした2年間

はあっという間でしたが、とても充実した日々でした。大学院の授業は演習形式で行われますが、人数が少ないので、すぐに発表の順番が回ってきてしまい、いつも準備に追われていました。さらに、教員採用試験の準備や修士論文の執筆も同時に行わなければならない日や休日でも、院生室に人が集まり勉強している状態でした。何もしたくない時もありましたが、遅くまで頑張っているメンバーを見ると、私も頑張らなくては、と気力がわいてきました。この2年間、くじけそうな時もありましたが、仲間と励まし合い、切磋琢磨できたからこそ、素晴らしい日々を送ることができたのだ

旅立つことば 大学院修了生から

学生生活を振り返って



社会学

地域社会研究専攻

小林 諒一

私が都留という土地に初めてやって来たのは、大学の入学試験でした。当時を振り返ってみると、甲府から中央線や富士急行線に乗って文大前駅まで辿りつく道のりが、非常に遠く感じたことを思い出します。特に笹子トンネルを抜けた後に見える景色や感じる気候は、今まで自分が住んでいた地域と異なっており、まさに「旅行」と表現しても過言ではありませんでした。

と思います。

私は、春から教員としての第一歩を歩み始めます。実は、大学生の時にも教員採用試験を受けたのですが、不合格でした。当時はショックでしたが、今思えば、大学院に入学するきっかけとなったので、逆によかったと思います。大学院では、大学の頃よりも専門的な授業を受けたり、非常勤講師をしている仲間から話を聞いたり、先輩からアドバイスをいただくなどしたりすることができたので、採用試験に合格することができました。これからの教員生活では、大学や大学院で学んだことを生かしながら、国語の面白さを伝えられるよう取り組んでいきます。

た。その後、まさか自分が6年間通い続けるとは想像していなかったのです。

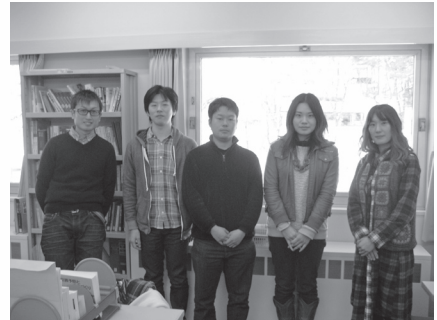
なぜそれでも通い続けることが出来たのか。それはひとえに「知的好奇心」からだと思います。大学での学びは、中学や高校のように決められた内容を与えられるものではなく、自分から積極的に動いて発表しなければなりません。そうした「受け手」から「送り手」へ成り得たことが、充実した大学生活を送れた理由だと考えています。

その思いを一層深めるために進んだ大学院では、より密度の濃い経験を得ることが出来ました。私の入った社会学地域社会研究専攻の特色とし

最後になりましたが、文学の奥深さや面白さを教えてくださった先生方、たくさんの思い出と一緒に作った学友、切磋琢磨した大学院の仲間たち、精神的・経済的にも支えてくれた家族、そして素晴らしいキャンパスライフを過ごさせてくれた都留文科大学に、心から感謝します。6年間、本当にありがとうございました。



院生室で仲間たちと



大学院の研究室にて

ては、自らが専門としている分野以外に、憲法、ジェンダー、社会学、生涯学習論など様々な専門分野を持った先生方と仲間たちが所属していることが挙げられます。多様な人々とのゼミでの討論は、社会を異なった視点から見ることの重要性を教えてくれました。

また学部時代から長きに渡って御指導頂いた菊池信輝先生には、感謝の意に堪えません。特に大学院2年での修士論文では、なかなか筆が進まない時期があったのにも関わらず、辛抱強く付き合ってくださいました。そして「歴史学研究会」や「同時代史学会」といった研究会への参加は、新たな知識を得たことの喜びを感じるのと同時に、研究者として生きていくことの厳しさを味わう機会でもありました。

とはいえ大学院修了の時を迎え、こうした知的好奇心が解消できたのかと言えば、全く逆であり、これからも勉強を続けていく必要性を感じています。これからも学びの意欲を失うことなく、人生を歩んでいく所存です。

旅立つことば 専攻科・修了生から

It's never too late



英語英米文学専攻

小高聖恵

私は現職の高校英語教員として、国内留学制度により都留文科大学の大学院で学ぶ機会をいただきました。思えば、朝の通勤で山々に囲まれたキャンパスと光り輝く銀のドームを高速から眺めながら、「もう一度学び直したい!」と心に決めたことから、挑戦は始まりました。働きながら学ぶということへの挑戦、家庭との両立、等々…。その裏には、温かく見守ってくれた家族、大学院の先生方、同僚の先生方、そして美味しいコーヒーを飲みながら語り合った大学院の友人の支えがありました。多くの方々に支えられ、貴重な2年間を過ごすことができたことに感謝しています。

大学には数え切れないほど学びの機会があり、2年間では時間が足りないと何度も思いました。特に2年目は、職場復帰をしながらの通学でしたので、限られた時間をいかに“濃い”時間にすることが課題でした。週1回通学の度に、先生方は新たな示唆や研究テーマを与えて下さり、研究室にて充実した学びの時間を過ごすことができました。振り返ってみても、素晴らしい恩師に出会え

たということが私の大きな宝となっています。

また、国内外の大学での様々な研修会に参加したこと、特にハワイ大学でのアジア太平洋英語教師研修会は、各国の英語教師と共に様々な意見交換し、グローバルな視点を養う貴重な機会となりました。

学びながら教える、という生活は思った以上に充実しており、不思議とバランスがうまく取れたことも驚きでした。前日に大学で学んだことを次の日の自分の授業に生かしてみる、そしてその反省をまた大学の次の授業で検証する—という風に試行錯誤しながら大学院での学びを深めることができたことは大きな収

穫です。

“It's never too late” —この学びの経験は、英語教員としてのこれまでの自分を見つめ直せただけでなく、今後の教員生活のさらなる大きな指針となるに違いありません。2年間、本当にありがとうございました。



研修先のハワイ大学キャンパスにて

最後の春に



比較文化専攻

佐藤由佳

コートをしまい込むには少し肌寒いし、通りにはまだ雪が残っている。それでも日差しは確実に暖かく感じられる。はやいもので、都留での最後の春を迎えようとしている。季節の移り変わりを何度も繰り返したこの土地で、自分がどのように過ごしてきたのか、この場を借りて振り返ることとする。

私にとって大学院での生活

で思い出深いのは、やはり院生室のあの雰囲気ではないかと思う。入学したてのときはまだ「院生室」という空間に少しばかり気負っていたところがあったけれど、院生としての生活にも慣れれば、部屋にもよく足を運ぶようになる。そうなってからすぐに気づいたことがあった。院生室へ向かう廊下を歩くと、たいていはドアから光が漏れている。先輩が来ているのだ。私が部屋に入ると、ずいぶん前から来ていたらしい先輩方が熱心に調べものをしていることがよくあった。なにか熱量のようなものを感じさせる活気があり、時折和気あいあいとおしゃべりもする。そんな院生室へ入って行き、先輩方

旅立つことば 大学院修了生から

文大での学びを胸に



大学院文学研究科
臨床教育実践学専攻

村上 萌

私は都留市出身です。小・中学生の時には文大の教育実習生が来たり、総合学習で沖縄県人会の人たちと交流をしたりしましたが、私にとって文大はとても遠い存在でした。文大に入学してからは全国から集まる高い志を持った仲間と出会い、卒業してもなお切れることのない絆が芽生える我が大学を誇らしく思います。

大学院の生活はあつとい

と同じ部屋で本を読み、ときには話の輪へいれてもらうのがとても好きな時間だった。

また、大学院での授業はとても自由な場であった。無意識に自分とは関係がないと思いついていた世界にも、「無関係ではありませんよ、こんなに簡単にアクセスできますよ」と連れていってくれるような軽やかさがあった。他専攻の授業をとった際もそれは変わらず、違う畑からやってきた私を快く受け入れてもらえたのはとてもありがたかった。英語英米文学専攻から選択した授業では、年齢も経歴もさまざまな仲間と共に学び、そんな彼女たちと顔を合わせるのが週に一度の楽しみでもあった。国文学専攻の授

う間に過ぎていきました。この2年間はこれまで培ってきた学びをさらに深める時間でもあり、自分自身と向き合う時間でもあったと感じています。新しく開講された「教育実践学演習」では文大附属小で約1年間に及ぶ定期的な実習を行いました。子どもたちを理解し、それを基盤にした授業実践を行うという、大学院で学んだ理論と実践を結び付けたものであったと捉えています。実習では、子どもを理解したつもりでも、いざ授業を行うと、その理解が活かされないという経験をしました。子どもたちと関わり続ける中で、自分の「子ども理解」が揺れたこ

業ではこの世界の成り立ち、その秘密にまで触れ、毎週息をするのも忘れるような濃密な時間を過ごした。学内を飛び出して勉強会にまで呼んで頂いたときには、場違いではありませんようにと、どきどきしながらおじゃましたのを覚えている。

学びの場を有意義にするには、あるものごとそのものを知りたいという好奇心があればよいのだと思っていた。けれども私は自身を振り返ってみて、自分の学生生活が有意義なものであったのは、周囲の人に恵まれたことによるのが大きい、ということを見つけた。自身のこの学生生活を、感謝で締めくくることができるのを幸せに思う。



「学びの軌跡」

ともあります。この経験を通して、授業内外での子どもの何気ない発言や行動、様子に目を向けるとともに、子どもを理解しようとする自分自身を捉え直し続けることが重要であると実感しました。それは決して楽なことではありましたが、様々な感性や知識・経験を持った院生の仲間の存在が私を支えてくれました。講義内容や各々の研究についての議論はもちろん、日常の出来事や悩みを語り合える関係が築かれており、仲間の存在は安心そのものです。また、それぞれの専門的見地から温かいご指導と助言をくださった先生方に出会えたことにも心から感謝しています。仲間と先生方がいたからこそ、研究者として自分の課題をどう捉えるのか、これから教師となり子どもを理解しようとする自分はどのような人間なのかということに徹底して向き合うことができました。大学院での学びが軸となり、これからの人生を支えてくれると信じています。

すべての出会いに感謝しています。ありがとうございました。

卒業論文・研究論文・修士論文一覧

学部卒業生、文学専攻科、大学院研究科修了生の卒業論文、研究論文、修士論文の全タイトルを掲載します。ただし、今回掲載する内容は、今年度提出された卒業論文等であり、実際の卒業生・修了者とは異なる場合があります。

初等教育学科

麻場一徳ゼミ

- 北村千聖 女子 400 mにおける区間ごとの疾走ペース分析
 下司沙織 股関節が疾走時に及ぼす影響
 鈴木喜久 ラグビーにおけるプレスキックの動作分析
 疋田舞弥 都留文科大学陸上競技部員におけるフルスクワット・クリーン・ベンチプレスの最大挙上重量・立五段跳の記録・最大疾走速度の相関関係
 前川奈央 ピッチとストライドから見る 100 m走の考察—都留文科大学陸上競技部員 N、M の 10 年間の記録から—
 松山文奈 女子 100m 走におけるリアクションタイムがパフォーマンスに及ぼす影響
 三橋俊介 野球のポジション別にみる性格特性
 森 小夏 音楽聴取が有酸素運動時の心身に及ぼす影響について

市原 学ゼミ

- 茉麗卡 高校時代で受けた進路指導の進路成熟度及ぼす影響—副題 進路成熟度の日中比較—
 菊川郁美・紺野健・松本康平 ストレスコーピングの選択および有効性に対する可変生知覚の調整効果
 小林まち・佐々木ゆい・佐野綾華 学業における制御適合
 大庭美琴・亀田朋那・中村茉未 学業成績に対する制御適合の影響

春日作太郎ゼミ

- 神田一成 大規模サークル活動における親しくなるためのきっかけづくりとしての構成的エンカウタグループのエクササイズの効果
 木村花菜 即興ムーヴメントによる青年女子の自己イメージの変容
 小林祥大 身体表現活動による大学生の対人緊張の低減
 西村美帆子 寸劇表現による大学生の気付きと成長の過程
 村井裕季 描画活動を用いた大学生の自主グループにおける自己認知と行動規範の変容
 中山瀬里香 「こんな大学に来たくなかった」という学生の音楽系サークル活動による変容

後藤道夫ゼミ

- 青山典義 橋本ビジョンにおける政治改革と教育
 兼子みさき 日本の温暖化防止政策
 小林洋介 尖閣列島、台湾にみる領土問題
 佐藤真生 町おこしと自治体の自立

- 佐藤由梨 育児休業制度の成立と発展
 西尾愛美 ヘッド・スタート計画からみる教育格差是正政策
 花崎隼生 日本における労働処遇のジェンダー問題について
 平林慎也 日本農業の特質
 藤沢卓弥 尖閣列島をめぐる議論の整理

坂田有紀子ゼミ

- 志戸岡直希・砂田真宏・山口夏季・熊王友紀 カワラナデシコの保全を目指してⅤ—都留市鹿留川におけるカワラナデシコの訪花昆虫の行動が種子生産に与える影響—異なる光環境における比較—
 石田悠也・宇佐美侑輝・鈴木若菜 カジカの戻ってくる川を目指してⅤ—カジカは攪乱に強いのか？—人為的攪乱と洪水攪乱—

佐藤 隆ゼミ

- 臼城美穂 子供の貧困—教育機会の不平等—
 高野優花 子どもと向き合う—渡辺克哉実践から学ぶ—
 田中千智 宿題の意味とは
 田村航祐 学力をめぐる言説空間の問題性
 鶴田真美 教科書実践の可能性
 仲宗根里奈 子どもたちが広げる繋がり—心地よく、暖かいものを目指して—
 長田裕美子 教員の権利
 藤本理奈 学習塾からみた日本の教育
 松尾純一 子どもの求める授業—何のための授業か—

清水雅彦ゼミ

- 齋藤寛希 こどもたちの心を育てる—音楽教育の実践に向けて—
 長谷恵夢 音楽の力—聴覚障害児も心からたのしめる音楽を—
 村松杏理 歌い継がれる唱歌・童謡の魅力
 森 麗実 美しい声で歌うために—メソッドと実践—

相守光恵ゼミ

- 萱沼亜里沙 音楽教育—音楽表現の可能性を求めて—
 重森佐知子 学校教育における効果的な音楽の活用法—音楽の授業に苦手意識を抱いている児童の想いから—
 重森千波 音楽が人々に与える力—音楽療法から—
 壺井祐一 学級経営における音楽の活用—アイスブレイクに焦点を当てて②—
 東郷華野子 PTSD と音楽の可能性—PTSD と音楽療法

卒業論文一覧・初等教育学科

の適用事例から考察する—

- 樋口美菜子 音楽の力 —東北地方太平洋沖地震より—
 山西佑果 J.S. バッハを追究する —17・18 世紀におけるドイツの歴史的背景から、J.S. バッハの音楽と生涯を考察する—
 若松千晃 障害児に寄り添う音楽 —障害をもつ姉と音楽の強い結びつき—

添田慶子ゼミ

- 喜屋武勇二 女子サッカー（なでしこ）に関する研究
 小寺未来 開脚前転の指導に関する研究
 佐藤公美子 本学学生の生活習慣と精神的健康の関連性について
 杉本貴昭 統一球についての研究
 塚本拓人 成長期における野球肩・野球肘を引き起こす環境的要因について

平和香子ゼミ

- 堀川修平 教員志望大学生における性意識と性行動に関する研究
 竹内萌衣 大学生の食生活に対する意識と行動の関連について
 広瀬麻衣 大学生の食生活に対する欠食実態と意識の関連について
 尾山優稀 学校教育における地産地消に関する研究
 上原由希奈 地域的食育運動及び家庭教育における地産地消に関する研究
 荒井由美 都留産青はた大豆を用いて調製した米味噌の食味評価及び高付加価値化に関する研究
 北井恵里香 都留産青はた大豆の食味評価及び高付加価値化に関する研究

高田理孝ゼミ

- 遠藤杏奈 失敗経験後の原因帰属の違いが自己効力感に及ぼす影響
 沖 裕花 メタ記憶 —既知感 (FOK) の評定と再認正答率との関係—
 荻野祥一 音読と黙読が文章中の単語処理に及ぼす影響
 北川裕之・野上和章 英語読解におけるスキーマの役割
 久保田晃司 反復書記効果による記憶への影響
 谷口麻衣 子供期の回想に見る現代青年の親子関係

竹下勝雄ゼミ

- 鈴木 悠 図画工作における鑑賞教育と導入のあり方
 中山智代 人の心を惹きつける広告美術
 永山小百合 絵本美術館と教育の関わりについて
 花田智也 快適な制作環境構築のための一提案
 本田有希恵 新しいものを取り入れて進化していく図画工作 —教材開発—

田中昌弥ゼミ

- 入倉こころ 小学校外国語活動におけるナラティブ的な授業づくり —関わり合いの中で自己を広げる学習—

- 上地妃南子 「学級崩壊」現象を乗り越える学級づくり —担任教師の立場からできること—
 大峠智子 いじめ対策の国際比較 —学校現場を中心として—
 田中賢人 葛藤を抱える子どもたちとともに進める学級づくり
 谷 美果 地域に根ざした教育実践の検討 —鈴木実践と今日の実践との比較—
 中田英里 安心と信頼を育む学級づくり —20 年間の生活指導実践の変遷を通して—
 藤岡大地 いじめを乗り越える学級づくり —子どもどうしをつなぐ学級経営—
 堀 亮友 ゆとり教育が目指した「個性」の今日的検討
 本多晴香 子どもとつくる学びの場 —困難を抱える子どもと共に—

筒井潤子ゼミ

- 山野辺祥子 青年期に及ぼす親子・家族関係を少年犯罪から考える
 阿部恭也 児童養護施設の子どものとって「親」「職員」とは —施設の子どもとの関わりについて考える—
 小原有希代 子どもの自己肯定感を育む子育てとは
 菊永京子 コミュニケーションにおける無意識的行動の役割
 来海智洋 子どもたちの心に響く教育 —灰谷健次郎の教育観・子ども観から考える—
 栗田 勤 不登校から見る教室づくり —居場所を作るための教師の役割—
 小坂麻衣子 子ども虐待 —教師の立場で何ができるか—
 菅原沙紀 寄り添うということ —“聴く”ことに焦点を当てて—
 竹山理美 自己形成過程と教育 —自己表現の側面から教育環境を考える—
 羽田沙織 障害・しょうがいを支える —支援者が抱える問題から見えてくるもの—
 藤井瑞希 「生きづらさ」を見つめて —ありのままの思いと向き合うなかで見えてきたもの—

鶴田清司ゼミ

- 雨宮早紀 効果的な作文教育とは
 伊藤穂波 賢治童話の新たな教材化 —教師宮沢賢治から学ぶこと—
 大塚勇登 対話能力を育てる授業づくり
 川瀬翔太 ICT活用で授業は変わる —わかりやすい授業を目指して—
 具志堅圭乃 心に残る詩の授業とは
 込堂さくら 「きつね」と子ども —「きつね」作品を通して伝えたいことは—
 鈴木優子 ファンタジー作品で育む想像力
 平松祐子 批評力を育成する授業づくり
 細川 幸 話し合う力を育てる授業
 丸山信基 言語活動の充実 —「白いぼうし」（あまんきみこ）の授業から考える—

卒業論文一覧・初等教育学科

寺川宏之ゼミ

井森奈緒子 ピタゴラスの定理とピタゴラス数
 栗栖正行 3次方程式の解とその証明
 坂脇 翼 角の三等分は可能か
 里居美希 オイラーの公式
 佐藤 準 小学校学習指導要領算数科の読み深め
 津村智美 インド式数学の原理
 架谷有沙 円の数学
 松原 優 数の合同とその性質

鳥原正敏ゼミ

荒木健一 図画工作の可能性 ―言葉と表現―
 佐々木ちえ子 図画工作科における伝統と文化の活動
 降旗さやか 感性を育む図画工作の活動 ―木の文化とぬくもり―
 松尾幸大 図画工作科の評価方法に関する一考察
 丸山理紗 世界の教育と日本の図画工作
 森 一平 生きる力を育む粘土の表現 ―図画工作の活動を通して―

中井 均ゼミ

岡本祥歩・小峰理沙 富士山の火山灰研究において都留文科大学が果たした役割について
 大嶋美穂・小野寺遙香・福谷享平・藤井智之 都留の地学教材研究 ―大幡川流域―
 大川早紀・齋藤絵里香・榊原麻衣 沖縄本島の海岸砂の研究 ―其の二―
 笹間俊輔・佐野 敦 富士川の川砂の研究 ―その2―

西本勝美ゼミ

奥本紀彦 通学区域の変遷はどのような影響を与えるか ―山梨のことを中心として―
 加藤 優 競争を強制されない社会を目指して ―不登校・登校拒否の検証から―
 鐸本直輝 安心して人とつながりあえる場をつくる ―フリースペースの取り組みに学ぶ―
 宮保茉奈 共に食べるということ ―子どもの食環境を食卓からとらえる―
 山本翔太 「つながる」農の教育 ―農の経験から生まれる学び―
 菊地佑介 現代の課題から学校づくりを考える ―少子高齢化時代を生きる子ども―

西山利佳ゼミ（藤本 恵ゼミ）

秋田雄大 綿矢りさ『蹴りたい背中』論
 岡本 薫 荒木飛呂彦『ジョジョの奇妙な冒険』論 ―ジョジョの奇妙な魅力―
 春日健太郎 佐藤多佳子『一瞬の風になれ』論 ―爽やかさと軽さに見る現代の「成長物語」―
 菱山七恵 太宰治『走れメロス』教材論 ―メロスは勇者かばか者か―
 山崎 葵 森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』論 ―御都合主義の裏に隠れた策略―
 山本英明 西尾維新『少女不十分』論 ―“偽”私小説の

技法―

武井輝弥 宮澤賢治『銀河鉄道の夜』論 ―賢治の揺らぎ―

箱石泰和ゼミ

荒木康子 授業における発問 ―齋藤喜博氏と西郷竹彦氏の実践に学ぶ―
 佐藤純平 一斉授業の可能性
 西川遼平 齋藤喜博の教育思想にみられる「無限の可能性」という言葉について
 松坂奈津希 身体表現活動の教育的意義
 三輪元希 林竹二の授業観の深化について ―授業 人間についてを中心に―
 宗次大輝 小学校教育における ICT 活用の可能性と課題についての考察
 黒澤健太 授業における教師の言語活動

長谷川武博ゼミ

浅野大地 算数数学教育を男女差をふまえて考える
 加地盛人 算数教育における児童のつまづき
 川崎祥二 算数教育における人間形成 ―考える力の育成―
 久保田博文 数学教育史から学ぶ学力低下 ―算数・数学教育の変遷から考える―
 近藤泰生 都留文科大学における学力調査 ―一般入学者と推薦入学者の学力差はあるのだろうか―
 藤田聡希 じゃんけん必勝法
 松葉貴士 児童に苦手意識を持たせない授業作り ―分数の計算―
 森脇雄史 小学校教育の課題解決へ ―グラフ理論を初等教育に生かす―

平野耕一ゼミ

古賀壮一郎 宇宙論的観測による宇宙論パラメーターの決定
 酒井このみ 教員の理科離れの現状とその改善策の検討
 田中愛由菜 小学生を対象とした環境教育の効果的な方法の研究 ―リデュース・リユース・リサイクルについて―
 古山娑菜 小学校における実践的な放射線教育について
 本多正典 都留文科大学における学生の理科学力と人間関係の相関について
 前原佐登恵 教師にも生徒にも分かる理科実験マニュアル本の作成
 松崎麻美 再生可能エネルギー導入によるコミュニティのスマート化の検討

森 博俊ゼミ

片山忠成 特別支援教育の移行期に伴う困難と子どもへの支援
 関根瑠美 発達障害を抱える青年の「社会参加」に向けた困難と可能性
 宮内亜衣加 発達障害等を抱える子どもの協働と支援に関する事例検討
 山下拓実 「障害」の受容に関する事例検討
 和田祐樹 学習に「不適応」を示す子どもの不安に関する

卒業論文一覧・初等教育学科

検討 ―その理解と支援を中心にして―

柳 宏ゼミ

- 石川雄一・峰 勇太 オリンピック研究 ―ロンドンオリンピックから―
- 岩井麻美 スポーツの認知度に関する研究 ―ボート競技に着目して―
- 川久保美里 学習効果に関する研究 ―「競争不安」と「学習不安」との関係性に着目して―
- 佐藤 栞 スパイクのボール速度と運動能力及び体力との関係 ―より強いスパイクを打つための一考察―
- 佐藤 光 バスケットボール競技のスリーポイントシュートと勝敗の関係
- 田上千尋 都留文科大学学生の食生活に関する研究 ―食事バランスガイドを用いて―
- 西山佳那 子どもの運動あそびとコーディネーション能力の関わりについての研究
- 細野貴寛 小学生の運動生活調査研究 ―甲斐市立双葉東小学校と横浜市立森の台小学校の場合―
- 堀内理沙 ミニバスケットボール選手の基礎体力と技術との関連性について ―平成 14 年度と比較して―
- 八木橋絵美里 バレーボールゲームのゲーム分析研究 ―サーブ効果が勝敗に及ぼす影響, 3 ブレイクポイントに着目して―
- 山本優里奈 バレーボールのレセプション技術に関わる要因についての研究 ―本学バレーボール部員を対象として―

山崎隆夫ゼミ

- 牛奥美沙希 自分が大好きだと思える子どもを育てるには ―現代の子育て事情を考える―
- 牧 雄一 本当の自分を支える親子の関係
- 社本歩未 いじめ問題を考える―教師はどう向き合うのか―
- 日野 愛 学童保育で育つ子どもの力 ―子ども期を子どもらしく生きることとは―
- 蓮子 葵 子どもが安心して過ごすことのできる教室づくり
- 青嶋奈津希 「いい子」として生きる苦しみと人間的自立
- 丹川裕美子 今日の子どもの達の「攻撃的」な感情と生きる願いを考える
- 北島愛菜 子どもの生きる力と「失敗・間違い」体験
- 久保彩香 子どもの成長と「あそび」の持つ力
- 丸茂綾子 今日の子どもの生きづらさと子どもの思い

山森美穂ゼミ

- 井出優子 自然体験活動を効果的にとり入れた環境教育
- 加藤紗由美・渡邊明日香 理科へつながる効果的な生活科 ―化学分野を中心に―
- 斎藤涼子 地域の河川を活かした地球環境教育
- 塩見大樹 都留市における大気エアロゾルと放射線量の連続測定
- 檜垣友里・東谷佳奈 子ども向け新聞における地球環境問題の伝え方 ―成層圏オゾン破壊を中心に―
- 湯村佳奈美 科学的思考力を高める小学校の理科実験

卒業論文一覧・国文学科

国文学科

上代文学 鈴木武晴ゼミ

- 石井 遥 記紀万葉における左右について
- 石田達也 万葉集における神話的思想
- 伊藤琢郎 万葉集における気象現象
- 江尻留美 『万葉集』七夕歌における万葉人の独自性
- 鬼形華奈 上代作品における蛇との婚姻がもたらす意味
- 川上綾香 上代の髪飾り ―万葉びとと植物―
- 木村賀恵 上代文学におけるミソギとハラヘ
- 島宗愛美 万葉集の色彩表現 ―主に白と他色の組み合わせについて―
- 惣元いづみ 大伴家持と植物の歌
- 田中みほ 「月の船」論 ―その発想源をめぐって―
- 藤原麻由 上代文学における死、死後世界についての研究

中古文学 長瀬由美ゼミ

- 浅川美保 『浜松中納言物語』にみる春の夜の月
- 荒井希和子 中古文学における琴の役割 ―『住吉物語』を中心に―
- 一木弥恵 『更級日記』における夢の描写について

- 一瀬 舞 『蜻蛉日記』における宗教的意識について ―道綱母の信仰心を探る―
- 大内拓馬 平安文学における潘岳の受容について
- 木下杏里 源氏物語の読者と物語観
- 高橋 華 『とりかへばや物語』女君の内面の性について
- 竹内 都 『堤中納言物語』虫めづる姫君 ―姫君の女性性からの逸脱について―
- 塚原由佳 『浜松中納言物語』における「宮中」を表す表現について
- 萩原愛沙美 女性の美的表現について ―なまめく・なまめかしを中心に―
- 牧野優樹 王朝の文学作品における「思ひわたる」
- 宮嶋彩未 平安文学における「悲秋」概念の受容

中世文学 佐藤明浩ゼミ

- 浅井翔子 『十訓抄』の音楽に関する説話についての考察
- 五十嵐 桃 慈円の題詠和歌について ―堀河院題を中心に―
- 奥田彩乃 『六百番歌合』における藤原良経の本歌取り
- 小佐野めぐみ 冬歌についての考察 ―新古今集を中心に―
- 木村洋子 曾我兄弟をめぐる陰謀と『曾我物語』

卒業論文一覧・国文学科

園木早紀 「鶉」が詠まれる和歌 ―時代をたどって―
 高橋真衣 和歌における「夢」について ―『新古今和歌集』を中心に―
 田村芽生 詞章から迫る能 ―「鶴」の場合―
 菱田 郁 「木幡の時雨」論 ―涙の表現を中心に―
 渡部恵里奈 崇徳院の「瀬をはやみ」の歌をめぐる

近世文学 楠元六男ゼミ

四十内遥香 『雨月物語―青頭巾』の世界
 小川香奈 北枝「卯辰集」について
 草刈友恵 山口素堂『蓑虫説』を巡って
 工藤隆彰 佐野紹益と上層町衆の展開
 佐藤美朝 遊郭と梅毒の変遷
 佐藤結美 御伽物語と富尾似船
 里森 悟 「勧進帳」論 ―七代目・九代目團十郎を中心として―
 高橋 茜 山東京伝『安積沼』について
 林 宙美 『聯珠詩格』について ―柏木如亭の『聯珠詩格訳註』を中心に―
 前島美里 「近世における熊野比丘尼の変容 ―売女としての比丘尼」
 森 翔大 林義端について

近代文学 阿毛久芳ゼミ

今江夏樹 角田光代『対岸の彼女』論
 上野正子 谷川俊太郎『二十億光年の孤独』論
 遠藤美和子 梨木香歩『家守綺譚』論
 岡村麻由 三島由紀夫『熱帯樹』論
 小川実華 江國香織『ぼくの小鳥ちゃん』論
 柿田圭裕 萩原朔太郎『月に吠える』論 ―季節の推移を手がかりに―
 片山さやか 北杜夫『夜と霧の隅で』論
 柄澤尚美 『世界の中心で、愛をさけぶ』論
 高野創太 安部公房『ゲンドロカカリヤ』論
 田崎彩夏 山田詠美『風味絶佳』論
 土井智美 幸田文『流れる』論
 中村香菜 川端康成『みづうみ』論
 見本香苗 谷崎潤一郎『魔術師』論
 山極佳代 乙一『夏と花火と私の死体』論
 山下万里子 坪田譲治『お化けの世界』論
 山本真水 長野まゆみ『少年アリス』論

近代文学 新保祐司ゼミ

川越麻美 児童文学と戦争論
 小林芳久 近代文学映像化作品論
 竹内香奈 田山花袋と紀行文学論
 田中志佳 宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』論
 西村知貴 向田邦子論
 樋口康二郎 宮澤賢治『銀河鉄道の夜』論
 平井遥香 鈴木貫太郎論 ―武士道の変遷―
 松本圭弘 開高健の釣行記における自然観と生死観
 宮澤勇氣 村上春樹『海辺のカフカ』論
 望月郁子 坂口安吾論
 山本香織 高校教科書に掲載されている近代文学について

近代文学 野口哲也ゼミ

小澤 築 太宰治『女生徒』論
 小高郁恵 森鷗外『山椒太夫』論
 木村匠吾 遠藤周作『沈黙』論 ―ロドリゴの辿り着いた場所―
 櫛 冬威 芥川龍之介『羅生門』論
 鈴木菖子 村上春樹『アイロンのある風景』論 ―「からっぽ」を満たすもの―
 関口 歩 『舞姫』論
 高橋航慈 川端康成『眠れる美女』論 ―語られる娘の生と死の先に―
 仲井真建一 川端康成『雪国』論 ―ひび割れる鏡―
 藤田ゆき乃 村上春樹『眠り』論
 古田 好 川端康成『禽獣』論
 村上彩香 宮沢賢治『よだかの星』論
 村上幸大 太宰治『道化の華』論
 柳沼雄太 三島由紀夫『憂国』論 ―錯綜する「視線」―

近代文学 古川裕佳ゼミ

阿部大地 「江戸川乱歩『べてん師と空気男』」論
 井上里美 泉鏡花『草迷宮』論
 伊庭聖美 金井美恵子『兎』論
 宇座麻瑠恵 三島由紀夫『真夏の死』論
 大柿 結 夢野久作『押絵の奇蹟』論
 小田嶋紋香 井上ひさし『連鎖街のひとびと』論
 金田 晴 田山花袋『重右衛門の最後』論
 木村 茜 堀辰雄『風立ちぬ』論
 倉掛睦子 谷崎潤一郎『鍵』論
 陳 婷 有島武郎『或る女』論
 鶴田沙希 塩狩峠論
 原嶋紗里 吉屋信子『鬼火』論
 広瀬宏尚 自転車文学論 ―志賀直哉「自転車」を中心として―
 村松史野 福永武彦『世界の終り』論
 山下 薫 太宰治『お伽草紙』論

国語学〔古代語〕 中川美和ゼミ

朝飛依里 類義語の意味の変遷と分担について ―「たばかり」・「はかる」―
 井上亜梨左 漢字交じり仮名文における動詞活用語尾表記の機能について
 櫻井小春 中世軍記・説話における格助詞「を」の考察
 平野麻衣 中古・中世における時の推移を表す動詞の傾向と特性についての研究 ―「あく」「くる」「ふく」を中心に―

国語学〔近代語〕 鈴木裕史ゼミ

川野史織 都留文科大学学生の方言意識について
 田作あさひ 現代若年層における敬語意識 ―山形県長井市の高校生の場合―
 田中えみ 高校生からみたネットスラングに対する意識
 島山花菜子 岩手県紫波地方の方言について
 細井夕希 雑談分析
 松平彩香 狂言台本における妻の呼称について
 松山ひとみ 役割語の研究

卒業論文一覧・国文学科

宮島あすか 長野県南信地区方言の一断面
 望月穂奈美 山梨県国中地域の文末表現の世代差
 森 一見 新潟県上越市における「ごめんください」の使用実態
 矢野 基 井上雄彦作品に見る言語表現(オノマトペ等)の効用について
 横山 諒 愛知県尾張地方アクセント

漢文学 寺門日出男ゼミ

加藤誠教 『五山堂詩話』研究
 西野佑美 『唐代伝奇』における女性像
 野村亜紀 白居易の法思想について
 藤原太一 津田鳳卿の『韓非子』注釈について

国語教育学 牛山恵ゼミ

秋田洋佑 『走れメロス』研究 ―田近・田中論を中心に―

井出侑里 「地中の世界」研究 ―初期の「不思議の国のアリス」翻訳作との比較―
 今村友衣華 国語科におけるコミュニケーション能力の育成
 長田 望 文学の教育的価値
 小幡瑞香 芥川龍之介の児童文学研究 ―「蜘蛛の糸」を中心に―
 小玉未来 『少年の日の思い出』から見る思春期における友人関係と身に付けさせたいソーシャルスキル
 佐々木美佳 教材としての源氏物語
 鈴木祥恵 子どもが生き生きと活動できる国語学習 ―単元学習の有効性を考案する―
 高橋恭平 梶井基次郎・その背景と『檸檬』
 寶田愛子 発展的な学習としてのNIE
 中田みなと 戦後の文学教育研究
 東恩納央果 沖縄戦における読書資料研究
 増田早紀子 ファシリテーションの手法から考える国語科単元学習

卒業論文一覧・英文学科

英文学科

稲垣孝博ゼミ

板垣花奈 フォークナーの短編小説における2人の独身女性―ミニョーとエミリーが殺人を通して得たもの―
 市村 樹 *The Time Machine* におけるユートピア・ディストピア
 植松 綾 なぜホビットが指輪を託されたのか ―*The Lord of The Rings* における人間とホビット―
 岡田裕貴 ミステリー小説の新たな可能性を見出したAgatha Christieの作品とその特徴
 奥脇竜太 *The Old Man and The Sea* における老いの浸食
 栗賀 暁 英詩技法翻訳の必要性
 小井 茜 生き続けるシャーロック・ホームズ
 小高愛実 ピーターパンから見るパリの家族像 ―ジェイムズ・バリと大人にならない少年の関係―
 酒井久実 *Alice's Adventures in Wonderland* と言葉遊び
 下山直紀 Clive Staples Lewis の *The Chronicles of Narnia* におけるキリスト教の影響と幼少期の経験
 高田真明 *The Reconciliation* に投影された Lafcadio Hearn の女性観と人生観
 松原優樹 トマスモアの *Utopia* ―背景からみた意味―

今井 隆ゼミ

齋藤知之 Difficulties of Implementing English Immersion in Japan

大平栄子ゼミ

秋山莉菜 *Connecting Global Education to Global Human Resource Education in Japan*
 内田知沙 *The God of Small Things* と不可触民バクハの一日にみる指定カースト(不可触民)に対する差別

角田奈津紀 *It Gets Better Project* からみるジェンダー・マイノリティ ―教員として子どもにどう関わるか―
 上條愛世 *Sex and The City* から考える英語におけるオネエ言葉
 菊池亜彩未 *The God of Small Things* に描かれる小さきものの生き方
 關 恵理 インドの格差社会における貧困と教育
 田中絵里奈 *Dreams of Trespass* にみるイスラム女性―スカーフ着用をめぐる―
 田保奈津美 *The Joy Luck Club* に見る母娘の愛と葛藤
 辻 香織 *Kiki's Delivery Service* に見られるジェンダー
 中西絢香 *Gender Outlaw* からみるトランスジェンダー
 中村 茜 *Born into Brothels* にみる売春婦の娘たち
 長谷部朝子 *Harvey Milk* からみる同性愛者の苦悩
 村田早紀子 Deepa Mehta の *Water* にみる寡婦として生きる人生
 山口菜摘 バイセクシャルという観点から読む *Maurice* ―同性愛でも異性愛でもない性的指向とは―

奥脇奈津美ゼミ

加藤陽子 The Use of ICT in English Education
 萱嶋あき How to motivate learners in second language classrooms
 神田佳祐 英語教育における国際英語の有効活用
 久保和正 小学校英語教育における文字の導入の指導について
 黄士 展 How to Give Feedbacks in Teaching to Write
 小林芳江 言語と文化の関わりと国際コミュニケーション
 塩崎洋太 第二言語習得における動機づけ研究
 杉本哲也 第二言語獲得における母語の影響
 豎本 優 アニメを使った日英比較から分かる発想の違いとその英語教育への応用
 千葉 恵 第二言語習得と学習ストラテジーの有用性
 土山健治 A study of The standard English for speakers

卒業論文一覧・英文学科

of English as a second language
 野上 翔 イントネーションの重要性の再定義
 —speaking 能力向上を目指して—
 野田和伸 英語リーディング指導における語彙知識と背景
 知識の役割についての考察
 吉富良亮 L2 読解に関わる諸要因についての考察

儀部直樹ゼミ

飯塚知美 世界の食文化 —飽食大国アメリカ・宗教的価値観における異文化理解—
 磯部 静 アフリカ系アメリカ人の飛翔 —『ソロモンの歌』から読み解く自由—
 今田早紀 悲劇の背景 —白人社会に生きるオセロー—
 岩間美砂 『アンクル・トムの小屋』を読んで —女性としてのストウ夫人の思い—
 内田航平 南北戦争時の黒人兵士について —マサチューセッツ第 54 連隊から現代へ—
 内海重仁 ヘミングウェイ『日はまた昇る』(The Sun Also Rises) より —ジェイクとブレットの関係の虚無性について—
 大久保来夢 ティム・パートンの光と闇 —白黒の極彩色の世界—
 神谷亜理沙 奴隷制における歴史的変遷 —『ルーツ』から見る奴隷制の真実—
 小林明日香 奴隷制について —黒人たちの生き様と彼らの求めた“自由”とは—
 小林睦哉 アメリカ映画論 —アメリカ映画において黒人の果たしてきた役割とその変遷について—
 小林茉由 万人のための教育を目指して —アメリカにおける学校教育の変遷—
 齋木 斉 映画「グローリー」に見る南北戦争時代の奴隷社会
 三沢奈央 現代における人種差別と黒人の想い
 武藤あゆみ アメリカ黒人の呼称からみる差別
 吉野勇佑 現代アメリカとヒップホップ
 渡邊和歩 時代の変遷に見る黒人差別

窪田憲子ゼミ

大屋こづる Rebecca 再読 —父権制度からの脱却—
 勝俣千夏 J. K. Rowling Harry Potter 研究 —生と死の戦い—
 五関悠紀子 Jane Eyre における 19 世紀イギリスの女性像
 小松見佳子 Jane Austen Sense and Sensibility 研究
 中川満結 『人間の絆』における‘転職’の意味
 長澤 碧 Alice's Adventures in Wonderland —Lewis Carroll の愛したもの—
 萩原美樹 A Room with a View —Lucy の成長が示す階級社会批判—
 平井のぞ実 『復樂園』における宗教的感動の考察
 三浦匡裕 英国紳士とは何か —ジェーン・オースティンの作品からの考察—
 水野由加利 『不思議の国のアリス』におけるアイデンティティの喪失
 宮島由里絵 Bridget Jones's Diary から見る女性の在り方の変容
 吉久佳菜 欠点を持つ人々 —ジェイン・オースティン『エマ』研究—

竹島達也ゼミ

天口佑希子 Arthur Miller の 3 作品におけるホロコーストとユダヤ系アメリカ人 —他者と生きるということ—
 石川あゆみ The Zoo Story と Waiting for Godot についての考察と不条理の演劇について
 井出雄太 ホロコーストとアメリカ演劇に関する一考察
 宇辰幸夏 A Streetcar Named Desire 『欲望という名の電車』についての一考察
 小鹿朋美 Angels in America における演劇技法の分析
 小山田春香 The Normal Heart と比較し考察する Angels in America —思考し模索させるという演劇的戦略—
 笹浪菜津子 Torch Song Trilogy を介して見る、セクシュアル・マイノリティの抱える諸問題とホモフォビアに関する分析と私見
 佐藤貴紀 ユージーン・オニールとエルマー・ライス作品から見る表現主義の世界
 高木 淳 Neil Simon 作品の比較から見えてくる Simon 喜劇の本質
 根本寛朗 1960 年代演劇表象を通して見る「暗黒時代」としてのニューヨーク
 晴山淳平 劇作品における 9. 11 テロ以後の現代アメリカ政府と社会への批判 —Doubt, The Crucible, Stuff Happens の 3 作品を通して—
 松山 瞳 暗黒時代における黒人演劇三作品の一考察

中地 幸ゼミ

竹尾麻以 トニ・モリスンの『青い眼が欲しい』における黒人少女ピコラの精神崩壊
 中西 蘭 小説 Baby から読みとく沈黙と主体性との関係
 中橋彩緒里 Native Son における黒人青年 Bigger のアイデンティティ
 西村千絵梨 The Color Purple の黒人女性たちにみる性と人種からの自己解放について
 細部紗世 John Okada の No - No Boy におけるジャパニーズ・アメリカンのアイデンティティをめぐって
 舩田佳奈 “August Eschenburg” におけるピーター・パン・シンドロームの影
 馬津川千尋 Cynthia Kadohata's Description of the Japanese American Internment Camp in Weedflower
 渡辺美菜 Nella Larsen Passing から読み解く黒人たちの抑圧される欲望

西出公之ゼミ

牛奥達也 『英語ノート』と『Hi, friends!』について
 菅野佳浩 TED における英語プレゼンテーションの語彙分析
 佐藤尚太 英語教育とフランス語教育の関係性 —フランス語教育で英語教育を伸ばせるか—
 永里雄平 英語版防災マニュアルの語彙とスタイル
 西川 優 「ハーバード白熱教室」と大学英語教育
 槇山智栄 言語聴覚士の仕事について

卒業論文一覧・英文学科

福島佐江子ゼミ

- 青山汐美 ポライトネス ―ポジティブ・ポライトネスの観点から―
- 岩本愛美 依頼における補助行為の担う役割
- 桐村陽子 ポライトネスと英語教育
- 小林杏奈 Indirect Requests
- 澁谷 咲 ポライトネスストラテジー ―依頼の観点から―
- 助佐茉実 日本人英語学習者の語用論的誤り
- 関谷朋恵 断り表現と間接発話行為
- 高橋千咲子 語用論的誤りに関する一考察
- 高柳りえ ポライトネスの視点から見る英語教育の一考察
- 谷澤 大 コンピュータを介したコミュニケーションにおけるポライトネス
- 反保智栄 言語的性差に関する一考察
- 長谷川洋 テレビコマーシャルに用いられるポライトネスストラテジー
- 元水俊介 発話行為理論の再構築 ―法廷映画の談話分析による検証―

Hamish Gillies ゼミ

- 遠藤太紀 Why are Japanese Reluctant to Express their Opinion in English ?
- 小原千尋 Early English Education of Japan Compared with Asian Countries
- 高塚純希 How Much Can Entertainment Contribute to Improving English Language Skills and Enhancing Language Learning Motivation
- 高橋 慧 The Effect of Study Abroad on Japanese University Students' Motivation for Studying English
- 蛭田聖奈 What Difficulties Do English Native Speakers Face When Learning Japanese as a Foreign Language
- 廣田佳祐 Usage of Songs in English Classes to Enhance Junior High School Students' Motivation and Learning
- 布施俊一朗 Is Giving Rewards an Effective Way to Motivate People ?
- 毛利瑞貴 The English Speaking Skill of Japanese People

三浦幸子ゼミ

- 天勝志穂 A Study of Japanese Learners' Use of Metacognitive Strategies in Reading English.
- 井出裕佳子 Exploring Learners' Uptake and Perceptions about Recast
- 岡部 愛 Considering Effective Ways of Teaching Pronunciation of English to Japanese L2 Learners for International Intelligibility
- 片原寛子 Exploring Effective Ways of Reading Aloud to Improve L2 Learners' Reading Skills
- 河江 巧 Exploring Incorporation of Collaborative Learning into English Class
- 鈴木有希 Exploring Differences in Argumentative Strategies for Writing Styles between American and Japanese English
- 徳山琴美 Considering Effects of Learner - Learner Interaction in L2 Learning

- 野家優太 Effective Methods of Motivating Students to Learn a Second Language
- 福井裕佳 Exploring Teacher Talk as Comprehensible Input in Elementary School English Education
- 本間陽介 An Analysis of IRF Sequences Conducted by an Experienced Japanese Teacher of English
- 水野裕太 Considering Effective Writing Instruction in Cooperation between Elementary School Foreign Language Activities and Junior High School English Education
- 宮下友里 Considering Effects of Teachers' Input Enhancement ―A Case Study of an English Lesson in Junior High School in Japan―

鷲 直仁ゼミ

- 四十谷由美 日本人の宗教観
- 栗津好絵 日本にみる古代イスラム文化 ―イスラエル系渡来人の謎―
- 加藤有貴 『指輪物語』 ―登場人物が教えてくれる事―
- 坂浦めぐみ 服飾で見る西洋と日本
- 新谷友佳 様々な画家の作品から見るキリストの生涯
- 中町美香 メディアとしての児童文学 ―魅力と可能性―
- 西山紀子 赤毛の憂鬱 ―赤毛というマイノリティー
- 林 優花 日本文化はどのように受け止められるのか ―スタジオジブリで描かれる日本文化と宮崎駿監督が伝えたかったことから―
- 松本将拓 ジョージ・オーウェル『動物農場』と『1984年』と現代社会の比較
- 松本実紗 ピーター・パンにおける考察
- 八木亜沙美 C. S. ルイスとキリスト教
- 山田 舞 ビートルズの栄光 ―時代背景と詩―

卒業論文一覧・社会科学

社会科学

現代社会専攻

現代社会論ゼミ（指導教員：進藤 兵）

- 薄井 武 ベーシック・インカム構想 ―無条件給付について考える―
- 大澤かおり 日本型福祉の正義と倫理 ―貧困を解決するための思想とは何か―
- 尾崎公美 現代日本のまちづくりの課題と展望 ―石川県金沢市を事例に―
- 北村星那 不登校と学習権 ―貧困が要因の不登校を考える―
- 後藤彩乃 東日本大地震におけるデマ・風評被害
- 佐野 舞 過重労働とうつ病の社会学 ―過労自殺問題解決への道―
- 鈴木悠子 若者の就労意識と親子関係
- 野田明里 学力観の変遷と学校・地域社会の関係
- 山森高明 通常学校の学習障害を持つ子どもの教育 ―特別支援学級の担任の話を開いて―
- 武藤拓人 ロックの文化的意義と資本主義の関わり ―ロック文化の保護に必要なこと―
- 森本ゆうこ 教育における新自由主義
- 山中翔太 現代日本の農業問題と山梨の就農
- 渡辺一勝 内閣総理大臣のリーダーシップ ―求められる政治的リーダーシップとは―

現代史ゼミ（指導教員：菊池信輝）

- 中井裕子 TPPと日本 ―国内外の動きから見る日本の行く末は―
- 新垣力嗣 沖縄返還期における社会保障システムと民衆の視座 ―社会保障整備にみる沖縄復帰の再検討―
- 金子泰郎 近現代教育史に見るゆとり教育の考察 ―教育課程の変遷を手がかりとして―
- 山下翔平 首都移転問題に関する議論の考察
- 渡瀬はるか 「日本の経営」、「日本型生活保障」の崩壊にみる、犯罪動向の考察 ―秋葉原通り魔事件を事例に―
- 鳥越良介 第一次世界大戦と戦争責任
- 賀井由基 日本型企業社会の綻び ―雇用慣行の変化と労働者―
- 朝倉拓矢 朝鮮戦争と現代社会への影響

社会哲学ゼミ（指導教員：黒崎 剛）

- 東 千央 聖書から見る現代女性の生き方について ―福音派の信仰の視点より―
- 藤森美紀 労働における人間の疎外
- 森脇出海 ウィットゲンシュタイン哲学について
- 河野行宏 マックス・ヴェーバーの方法論 ―倫理論文と客観性論文における―
- 宮下恭輔 J. S. ミルの『自由論』について
- 山崎英里香 現代の演劇が求められているもの

生涯学習論ゼミ（指導教員：畑 潤）

- 磯 ちづる サブカルチャー・若者文化から得られる生き

- がい ―音楽を例に考える若者の自己表現、らしさ、アイデンティティの確立―
- 伊藤 駿 保育と学習権 ―公民館保育室から考える大学内保育所の今後―
- 岩崎 翔 ジャン・ジャック・ルソー著『エミール』と向き合う ―現代教育の視点からみたルソーの教育論『エミール』の考察―
- 佐々木大祐 今日の大学危機の本質 ―日本社会構造からの分析―
- 杉野倫子 地域住民と職員による協働の地域づくりを目指して ―福島県飯館村のまていな村づくり―
- 中村莉奈 青少年のための生きる力の育成 ―学校・家庭・地域が果たす役割についての考察―
- 浜野秀章 いじめの構造 ―現代のいじめの特徴とこれからの対策―
- 藤森 勇 学校と地域の在り方 ―佐藤学の学校改革の検討―
- 堀田真吾 学童期における子どもの発達 ―遊びと学校の視点から―
- 村上晴香 現代の保育所 ―今日の保育所のもつ課題とは―

企業経営・労働とジェンダーゼミ

（指導教員：野畑真理子）

- 岩井田浩司 情報通信技術の発展が労働に与えた影響について
- 郭 聡 少子化を促す諸要因とその対応策 ―日中比較を中心として―
- 勝間田静香 若者の労働問題 ―静岡県を例に―
- 高山明日香 フリーター問題と就労支援
- 藤井秋嘉 長時間労働の実情と諸問題
- 橋詰 佳 韓国財閥企業グループの形成過程に見る経営の特質と課題
- 松井日向子 現代日本における労働と余暇 ―真の豊かさを求めて―

憲法ゼミ（指導教員：横田 力）

- 岩柴恵理沙 多様な性と家族 ―同姓間パートナーシップと法の保障―
- 熊谷 基 現代史からみる沖縄 ―琉球処分から今日までの過程と安全保障―
- 高橋明子 日本国憲法と社会保障制度 ―公正なケアとは何か―
- 高橋郁子 日本国憲法（第25条）と社会福祉制度
- 高橋優磨 憲法学からみた人間と社会の相互不適合関係
- 富岡祐希 憲法における表現の自由と現代メディアの考察
- 宮原 徹 国民の教育権と今日教育行政 ―橋本大阪教育改革と危機の中の教育―
- 山本健人 信教の自由と政教分離の再検討
- 横田直樹 障害者自立支援法・介護保険制度と憲法

社会法ゼミ（指導教員：中益陽子）

- 遠藤 航 非正規雇用者におけるワーク・ライフ・バランスの研究 ―非正規雇用者と労働組合の問題―
- 亀村弘章 日本型雇用制現状と展望
- 近藤さくら 労働と民族的性格について

卒業論文一覧・社会学科

- 齊木美友 格差社会におけるフレキシビリティの考察
—セキュリティとしての住宅保障のあり方を考える—
- 佐藤大介 精神障害者の就労支援 —継続した支援をするために—
- 佐藤雄亮 女性の社会進出 —官民共同で何ができるか—
- 塩澤 遥 大規模災害における地域防災の今後のあり方
—釜石市と静岡市駿河区を事例に—
- 田辺純也 『都留市の労働者・産業の変遷』と今後の展望
- 名取悠人 教育の平等 —今後の学歴社会と教育改革—
- 福島 卓 原発労働者と安全 —原発労働者の労働環境を変えるために—
- 森 春菜 現代社会における子育て支援のあり方

日本経済論ゼミ（指導教員：村上研一）

- 荒井啓佑 マスメディアによる町おこしの可能性 —長野県活性化に向けて—
- 泉 佳那 北陸新幹線新高岡駅（仮称）の現状からみる利用促進と活用
- 梯 留美 観光客の誘客に対するイベントの影響 —御柱祭と善光寺御開帳を比較して—
- 葛城早紀 外資系ファストファッションブランドは日本でなぜ売れるのか？ —国内外のSPA企業を中心に—
- 小林花葉 大月における養蚕と絹織物の動向
- 後藤 遥 原子力発電所と立地自治体の財政
- 齋藤真惟 日光市の観光産業を通じての活性化の可能性とその課題
- 田中翔太 Jリーグの経済学
- 津川泰葉 ゆとり教育の批判論 —フィンランドからみた日本の教育—
- 廣川克巳 中心市街地の可能性
- 米山大裕 非正規雇用労働者の現状と今後 —雇用者視点と労働者視点の両側面による考察—

地方自治論ゼミ（指導教員：江波戸順史）

- 遠藤優介 教育委員会の将来的なあり方 —犬山市と出雲市の比較から—
- 乙川 郁 地方都市の観光政策と都市イメージの向上
—新潟市の批判的考察から—
- 加藤貴之 介護保険制度と自治体財政
- 岩下美紀 日本における減災社会の将来的展望
- 久保田知也 地方公務員改革に関する一考察
- 高木正志 学校（コミュニティ・スクール）を拠点としたコミュニティの形成 —学校と地域社会の持続可能な連携と新しいコミュニティ空間を目指して—
- 砂後大輔 これからの過疎地域に必要なもの —地域力向上に向けて—
- 齊藤愛里 住民自治の観点から考える地域づくり
- 中村直紀 観光による地域振興 —全国の例から考察する地域振興の可能性—
- 渡辺勇介 地域活性化のための住民参加型まちづくり
- 藤田智矢 地域防災体制の再構築 —広域防災に関する考察—
- 葉袋寛季 過疎地域における日常生活の改善への考察
—買い物難民及びコミュニティ崩壊問題解決へ向けて—

- 萩原真輝 観光資源による都市再生の可能性 —群馬県伊香保温泉について考える—

環境・コミュニティ創造専攻

環境社会学ゼミ（指導教員：箕浦一哉）

- 江本大輔 東日本大震災後の学生の防災意識の変化 —静岡県住民調査との比較—
- 尾臺由子 農業振興において若者が農業に興味を示す方法
—ノギャルプロジェクトを事例に—
- 栗田拓実 琵琶湖に浮かぶ沖島の現状と地域社会の維持
- 坂田裕梨 小水力発電の意義と可能性 —地域エネルギーの観点から—
- 廣瀬早紀 東日本大震災におけるソーシャル・メディアの利用方法から考える、災害時の情報利用
- 三浦晃範 原発を抱えるまちの過去と現状、そして脱原発をするために —宮城県女川町を事例に—
- 望月笑美 生活を軸とした原発立地計画問題の認識と対話の意義 —山口県上関町を事例に—
- 横田さおり 3. 11 後の上関町 —日本の脱原発運動が高まる中で—
- 吉岡亜実 協働のまちづくり推進のための課題 —都留市における市民活動と支援組織を事例に—

環境教育論ゼミ（指導教員：高田 研）

- 市川孝純 都留市の住民と家中川の関わり方の研究
- 奥山雄基 三原山と共に生きる —防災マニュアル試案—
- 加藤大智 砂糖は日本においてこれからも必要とされるか
- 川手勇太 日本在来馬のこれから —木曾馬を事例として—
- 佐藤 光 清水のサッカーによる地域活性化の可能性
- 杉山友紀恵 「自由教育」が子どもに与える成果の実相
—自由の森学園卒業生へのインタビューから—
- 日高悠那 小規模校から考える教育
- 松本真季 広葉樹における薪炭林としての利用について
- 三原春花 吉野川の環境教育のこれからについて —長良川と比較して—
- 森川千弘 魚食文化における魚の保存方法について —福井県若狭地方の伝統食「へしこ」—

地域環境計画論ゼミ（指導教員：渡辺豊博）

- 天野奈穂子 商店街の活性化とは —富士市吉原商店街を取り上げて—
- 岡森香央梨 環境再生から地域再生へのプロセス —コウノトリ野生復帰事業を事例として—
- 奥田健斗 オーガニックレストランの6次産業化 —農家レストランを軸とした新たな農業のあり方—
- 加藤 和 清流の村道志の現状から水を生かした更なる村発展のプロジェクトを考える
- 菊池晃成 タイマグラの歴史に見る人と自然の共生
- 小林盛希 地域協働の食育教育 —北杜市の事例を甲府市で活用—
- 柴田晃佑 地域資源としての護国神社の新たな保全・活用の提案 —都留市護国神社の事例から—
- 中込晴香 伝統工芸品の保存と継承及び将来に向けての活用 —山梨県南アルプス市若草地区を事例に挙げ

卒業論文一覧・社会科学

- て—
中島拓哉 小規模林業における森林再生の可能性
深見里恵 歴史的資源を活かしたまちづくりを地域おこしに繋げるには —宮崎県高鍋町高鍋城下町を例として—
丸山利絵 日韓の戦争遺産を通しての新たな友好のあり方についての考察 —韓国済州島平和博物館と若者交流を中心として—

地域社会論ゼミ（指導教員：田中夏子）

- 伊藤 愛** 過疎地域における望ましい地域づくりとは —合併、集団移転から考える—
貝瀬雄斗 スポーツを活かしたまちづくりの可能性 —地域におけるスポーツの今を探る—
香西 恵 地域おこしとしての森林とのかかわりはどのように可能か —山梨県南都留郡道志村と山梨県都留市の事例から—
雑賀 桃 博物館の教育プログラムに関する考察 —公立美術館においてワークショップはどのような可能性を持つのか—
崎田史浩 小規模自治体における地域づくりの課題と展望 —長野県木曽郡木祖村の取り組みを事例に—
佐藤結生 幼児期における環境教育の可能性・課題とは —見守り、子どもの自由を保障しながら自主性を育む教育のかたち—
中村哲平 社会的包摂にむけた余暇支援のあり方とは何か —「いこいのひろば」を事例に—
新居拓実 地方における大学進学、就職の動向からみた地域間格差
花房宏亮 仕事の場における遊びの創造的効果 —遊びの中に見出す豊かさ—
藤原優紀 地域メディアの多様性と今後期待される役割およびその担い手とは —伊東市の行政広報に見る地域メディアとソーシャルメディアの融合の可能性—

地域経済論ゼミ（指導教員：千葉立也）

- 石沢謙輔** 文化資源を用いた回遊型観光の可能性 —小田原を事例に—
石塚さゆみ 地産地消型学校給食の意義と可能性 —東京都日野市の実践から考察する—

- 北林大周** 住民主体の地域づくりからみる集落存続の可能性 —大仙市余目地域の事例から—
竹西美寿恵 世界遺産における観光 —宮島を事例に—
寺元静香 スローに生きる意味と可能性 —国分寺カフェスローとよこはま自然育児の会の取り組みから—

都市環境設計論ゼミ（指導教員：前田昭彦）

- 伊藤康平** 名古屋市の地域巡回系統における、目的と現状、改善点
長田州人 道の駅の防災に関する研究
糟谷 岳 都留文科大学附属図書館の建設構想の策定から建設に至る経緯と構想意図の達成度の評価
富田麻友 景観法に基づく景観計画の景観形成基準の「使い勝手」に関する研究 —大月市景観計画（素案）を事例に挙げて—
豊城祥行 江戸・東京における江東地域の地震災害史と防災の現状と対策
堀内成寿 現代の廃校利用における課題と展望 —地域における相応しい在り方の考察—
宮脇大地 東日本大震災時の学生たちの行動 アンケート —自由回答欄の考察—
持田睦乃 日本における美術館ワークショップの起源と展開
山本翔也 静岡県富士市における岳南広域都市計画事業第二東名 I C 周辺土地区画整理事業に関する研究
渡邊 駿 タイプ別小水力発電の採算性についての研究

農山村再生論ゼミ（指導教員：泉 桂子）

- 大城宙夢** 沖縄の林政に関する一考察 —蔡温に着目して—
小林浩司 学校林を活かした学習指導案作成に関する研究 —北杜市立小泉小学校を事例として—
小堀仁也 子どもに虫捕り遊びは必要か —1960年代における昆虫採集論争再評価と虫捕り（遊び）の現代的意義—
佐藤樹雪 登山者のマナーと倫理に関する実証的研究 —岩手県の山岳団体を事例として—
八木幸之助 北杜市八ヶ岳南麓における森林開発に関する研究 —平成以降の宅地開発を中心に—

卒業論文一覧・比較文化学科

比較文化学科

内山史子ゼミ

- 石合祥子** 文化の観光資源化 —タイ山地民を事例として—
井戸田真穂 バリ島における近代美術のゆくえ
大月 悠 尖閣諸島における問題とそれらを報道する国々の報道
岡田知美 シンガポールの言語とアイデンティティ
工藤僚太 オーストラリアにおけるベトナム移民のアイデ

- ンティティ
久保有平 「枯れ葉剤作戦」考察
志村歩美 東南アジアの相対的貧困について
瀬戸沙知子 現代日本の難民政策 —インドシナ難民を手がかりに—
竹下垂依 インドネシアにおけるテロ事件が政府にもたらす影響 —インドネシア・イスラム急進派をふまえて—
千葉はる香 ピブーン政権下におけるタイ人アイデンティティの形成 —中国人のタイ人化政策から—

卒業論文一覧・比較文化学科

西村理恵 台湾ニューシネマの誕生と特徴
萩原秀哉 華僑が中国の経済の発展に与えた影響
福嶋美由紀 カンボジアの地雷問題
村田良介 独立後シンガポールの経済発展と諸政策

大辻千恵子ゼミ

佐々木みゆき ワークライフ・バランス ―女性が活躍できる企業社会のあり方―
沼野有未 フィルムにみるストリートダンスの変遷 ―アメリカ 1980 年代から―
檜山陽介 脱原発への手段 ―再生可能エネルギーとその有効性―
平原瀬奈 外国人との「共生」 ―浜松市の事例―

大森一輝ゼミ

相田（早瀬）玲歌 日・米・仏の育児
縣 香里 米中人権論争 ―中国人権侵害問題のゆくえ―
石原夏香 多文化共生社会における教育
井手口あゆみ NY反ウォール街デモ ―オキュパイ・ウォールストリートの起こりから現在―
大澤愛里 アメリカにおける多言語教育
黒田郁美 9.11 後のアメリカにおける自由と安全について
佐々木梨香 写真花嫁から見る日系社会
白川友理 現代アメリカにみる格差・貧困
三島真知子 アメリカ先住民居留地の歴史と課題
村岡真理 アメリカにおける移民のエスニック・アイデンティティについて ―日系アメリカ人を例に―
山本翔平 世界のクルマ社会 ―安全なドライブのために必要なこと―

岸 清香ゼミ

秋保香穂 大衆化するミュージカル ―劇団四季の小学生無料招待公演「こころの劇場」を事例に―
今出恭子 Remember The Children ―ワシントン・アメリカ国立ホロコースト記念博物館「ダニエルの物語」を手掛かりに―
内田みさと 地域イベントによるまちづくり ―いいだ人形劇フェスタを事例に―
瀧 真理子 基地のある暮らしと地域住民 ―NIMBY 意識と住民投票のゆくえ―
水上諒子 平和学習が継承する記憶 ―長崎市青少年ピースボランティアの活動を事例に―
三井志保 現代日本におけるキャラクタービジネスの展開 ―ディズニーによるアイスショーの復活―

重富恵子ゼミ

中屋範子 福井県の原子力発電所における「住民の理解」についての一考察
長谷川早絵子 新潟県柏崎市の集落営農
畑山ちえ 主体の消えた暴力 ―カザフスタン共和国セミパラチンスク核実験場を事例に―
牧野仁美 「世界遺産条約」の理念と日本における実態の違い

溝手寛子 現代遊牧民と定住化政策 ―ケニア・マサイを事例に―
山岸沙織 多民族国家における移出民の背景 ―ニュージーランドの事例から―
山口雅香 日本における社会的責任投資
米長 彩 外国人児童生徒と日本人児童生徒の人間関係

鳥居明雄ゼミ

旭 大樹 村上春樹『アフターダーク』論 ―深夜の街における物語性の再獲得―
笹山佳太 進化する都市伝説 ―ネットを介して広まる年伝説―
高橋 周 アニメ・演劇・能によって展開される異界とその差異
谷山真央 公に尽くすとは何か ―近世武家社会における儒学の影響―
中村三千瑛 拝啓小泉八雲様 ―日本の神 神在祭のもと―
廣瀬早紀 日本人の名前の変化とその時代背景
服田 渉 NHK と政府の関係からみる公共性
松川くるみ 祭りの伝統と観光の共存 ―八戸三社大祭を事例として―
柳原弘幸 武士道

波田永実ゼミ

大村花織 映画で描かれた日米イメージの歴史的変遷に関する研究
小幡優子 戦後補償問題について
加藤峰朗 紛争ダイヤモンドの根絶は可能か？
櫻井詩織 紛争に対する人道的介入
篠原双葉 パレスチナ民衆蜂起の内実
柴田亜希 日本軍の生物、化学兵器の使用について
嶋田光成 日本・朝鮮半島・中国東北部の鉄道比較
住吉琢磨 3.11 の原発事故を踏まえて原発利用の正当性を問う
田川 翔 戦争死没者記念に関する諸問題
三浦 慧 沖縄戦における日本軍と住民
矢野沙也香 太平洋戦争下の日系アメリカ人のアイデンティティ形成と選択の諸問題

邊 英浩ゼミ

伊藤亜弥 大韓民国における婚姻のモダン化
大洲 茜 日本の葬送様式の変遷
谷口遼一 正義と格差是正
道林雅秀 アイデンティティについて
西谷 彩 神を信じる現代人
乗田真希 正義
林 一菜 東日本大震災について
福島良輔 原発の未来
古川愛里 ナショナリズムの超克
和孝太 領土ナショナリズム

福田誠治ゼミ

甘利 望 観光資源としての世界遺産

卒業論文一覧・比較文化学科

石井晴菜 旅 ―旅と生のメカニズム―

市川直樹 民族・移民問題から見る日本

岩泉めぐみ 幸福度世界一の北欧に学ぶ幸せの秘訣

大石弓馬 日本における外国人教育

小野恵梨奈 なぜ児童文学が教育に使われるのか

坂本貴彦 大相撲 ―その歴史と人気復活へ向けて―

杉山たかせ フランスの家族政策

園 大知 日本のカフェ文化について

中本貴弘 街景観の国際比較 ―歴史を残す町並み―

堀口恵里 若者の海外旅行者数の減少 ―海外旅行の現状と動向―

山本博美 白 ―色彩の背景―

分田順子ゼミ

大場麻里奈 現代日本の性暴力 ―デートレイプを中心に―

長田菜見子 グアテマラの戦時性暴力の構造 ―女性活動家たちが明らかにしたこと―

香西 幸 「ホームレスホーム」の可能性 ―いちむらみさこの思想と実践を通して考える―

清水裕美 戦争画とプロパガンダ ―第二次世界大戦期の日本の戦争画を中心に―

丹沢一葉 バングラデシュにおけるソーシャルビジネスの試み ―山口絵理子によるマザーハウスの目指すもの―

中瀬 舞 紛争後のボスニアにおける多民族共生社会の構築 ―子供たちへの教育支援を中心に―

藤沢真智 カタリバによる繋がり作り ―社会に開かれた学校を目指して―

藤谷拓馬 逸脱の違法化 ―「ドラッグ」に対する社会認識の変化―

山本日良羅 領土問題における国際条約 ―日本の領土問題をを通して考える―

渡辺実歩 「戦争花嫁」に関する一考察

渡辺梨沙 沖縄米軍基地がもたらす性犯罪と戦う女性たち

水野光朗ゼミ

坂手詩織 韓国における宗教について

坂本彩未 日韓関係について

中島詩織 日本におけるソフトパワーの活用

村上あゆち 日本人の中国人観

山本敬子 山梨県在住の外国人の現状 ―労働と教育の諸問題と対策―

吉田千恵 韓国の女性運動 ―1970年代から現在に至るまで―

米山陽祐 博物館の役割と、その在り方

渡邊 郁 大韓民国における婚姻概念について

山本芳美ゼミ

熊谷美奈 身に纏う髑髏 ―現代におけるスカルブームとファッションを読み解く―

新藤明日佳 児童虐待 ―社会的要因と解決策を探る―

杉森 宙 文化的観点から論じるB級グルメの功罪 ―コナモンに主眼を据えて―

武田綾乃 性の多様性と服装倒錯美 ―近代女装の変遷と

現代女装社会―

遠山美聡 見た目に対する社会の認識 ―大衆文化から読み解く―

秦奈央美 現代日本におけるポピュラー音楽と歌詞の表現特性 ―GRAYを中心として―

羽田佑太郎 ストリートスタイル ―モッズという生き方―

原ゆかり 世代考 ―ゆとり世代の精神史―

本 幸子 東京ガールズコレクション ―実店舗とEコマースの関係―

山坂結菜 コンビニエンスストアが変えた日本人の暮らし ―個食について―

渡邊秀紘 現代日本における仏教 ―葬祭仏教批判をめぐって―

研究論文・修士論文 — 文学専攻科・大学院文学研究科

文学専攻科

佐藤 隆先生

大室陽香 子どもの遊びに見える人間関係から学級経営のあり方を探る

野瀬健太郎 現代日本の教育改革 —自由化理論に基づく統制の強化とは—

古屋未来 学校で学ぶことの意味

目黒祥平 子どもの世界に入る教師像 —渡辺克哉のライフヒストリーを追って—

佐藤 隆先生・田中昌弥先生

高田朋未 今日の社会科の課題と可能性 —田所実践を通して—

東川春菜 通知表はどうあるべきか —パフォーマンス評価に着目して—

佐藤 隆先生・田所恭介先生

吉田恭輔 読書へのアニマシオンの世界を探る —現場の実践を通して—

佐藤 隆先生・渡辺大輔先生

権田好寛 「実感できる平和」の学びとはなにか —平和教育実践から考える到達点と課題—

筒井潤子先生

柄本剛宏 不登校児童生徒及びその家族への支援 —Tの事例から考える児童生徒及びその家族との関わり方—

長塚雅貴 子どもの心にあるものとその心に対する支援 —学級担任とスクールカウンセラーの両者の視点から考える—

大学院文学研究科

国文学専攻

牛山 恵先生

仲塚千香 雑誌「赤い鳥」研究 —投稿綴方・選評からみる鈴木三重吉綴り方観—

加藤静子先生

佐藤愛華 『とりかへばや物語』考

鳴海一徳 『狭衣物語』と三条西実隆

鈴木武晴先生

小坂萌実 上代文学の弓矢

英語英米文学専攻

大平栄子先生

望月のぞみ Female Sexuality in Anne Brontë's *Agnes Grey*

今井 隆先生

小高聖恵 Task-Based Language Teaching (TBLT) and the Japanese English Classroom

社会学地域社会研究専攻

菊池信輝先生

小林諒一 戦後日本における利益誘導型政治 —高度成長期における金丸信と山梨県政の関わりから—

野畑真理子先生

鈴木ひろみ 女性パートタイマーの基幹労働力化とワーク・ライフ・バランス

比較文化専攻

大森一輝先生

佐藤由佳 アメリカの格差社会はどのように強化されるか —スポーツと高校生をめぐって—

八木宏紀 緊張と安定の媒介者 —日本の「LGBT」を焦点としたアイデンティティ機能の考察—

邊 英浩先生

金 蘭 「韓」と「ハーン」 —韓流ブームからの分析

薩仁娜 内モンゴルにおける砂漠化 —赤峰市地域を事例として—

臨床教育実践学専攻

佐藤 隆先生

市川佳菜 学校教育における「評価」のあり方と「学び」の本質を問う —自由の森学園の教育実践を通じて—

高田理孝先生

藤原祐喜 学級集団づくりに関する一考察 —「共同絵画」を通しての学級の変容—

田中昌弥先生

藤丸知彦 教師と父母による子ども理解の今日的意義 —宮下聡の父母とつながる実践と教育懇談会を手がかりに—

筒井潤子先生

村上 萌 教師の自己理解とその深まりを探る —継続的な語りから見えてくるもの—

西本勝美先生

長谷川聡一 他者とつながる「出会い直し」の意義と可能性 —坂田和子への聴き取りを手がかりとして—

講演会だより

初等教育学科主催講演会

2012 年度初等教育学科主催講演会

副島賢和先生

「こころの声が聞こえますか」



当日の様子

2012 年 11 月 21 日（水）、音楽棟 3 階アンサンブル室にて 16 時 30 分から 19 時 30 分までの約 3 時間、初等教育学科講演会を行いました。講師には「さいかち院内学校」教諭の副島賢和先生をお招きし、「病院内学級から見た今日の教育」という演題で講演と体験学習をしていただきました。

副島先生は '89 年初等教育学科卒ということで、学会ではじめてお目にかかった時から「母校で何かお役にたつことができれば嬉しい」と仰ってください、今回の講演を快く引き受けて下さりました。

第 1 部の講演には 42 名、第 2 部の体験演習には 33 名が参加しました。遅くまで残って楽しんでいる様子が見受けられ、1 部、2 部ともに大変集中するとともに楽しいもので、有意義な時間となりました。

参加者へのアンケート調査として、企画の時期・会場・時間帯・曜日について、「良い」、「悪い」、「わからない」の 3 つの中から選んでもらいました。その結果としては、ほとんどの人が全項目「良い」でしたが、これは企画に参加

できている人に聞いているので当然ともいえます。中には時間帯について、6 限の時間は授業や部活で参加できない人も複数いたということが記されていました。以下に 1 部、2 部についての感想を自由記述してもらったものの中からいくつか例示します。

講演について：「副島先生のお話を伺っているとその時の場面が目に浮かび、リアリティが感じられ本当に現場で起きていることを伺わせて頂いているというインパクトがありました。」（初等教育学科 1 年）、「自分の進路は院内学級の先生だ！と思いました。」（初等教育学科 2 年）

体験について：「クラウンを初めて生で見て、すごく引き込まれました。コミュニケーションをとる、というの

は色々な手段や方法があり、色々な向き合い方があるのだと感じました。『大切に思っているということを相手側に伝えよう』と意識したことがなかったので、今後はそのような点にも目を向けてみたいと思った。」（初等教育学科 4 年）

「普段なにげなくしている、近づく、離れるという行動で、『大切にしている』という思いを伝えることは難しいなと改めて思いました。大切な出会いと別れを意識して行動していきたいと思います。」（専攻科 1 年）

最後になりますが、今回都留へお越しくださった講師の副島賢和先生、企画の宣伝のためにご協力くださった、各先生、並びに色々とお手伝いくださった皆様に感謝します。

講師紹介

副島賢和（そえじま まさかず）



1996 年福岡県生まれ。都留文科大学卒業後、東京都内の公立小学校教諭に。東京大学芸大院で心理学を学んだ後、2006 年から品川区立清水台小学校「さいかち学級」（昭和大学病院内）の担任に。共著に『学校でしかできない不登校支援と未然防止』（東洋館出版社）。09 年に放映されたドラマ『赤鼻のセンセイ』のモチーフにも。11 年 NHK『プロフェッショナル仕事の流儀』にも出演。

講演会だより

国文学科主催秋季講演会

2012 年度国文学科秋季講演会

辻原 登先生

「歴史と冒険のシンクロニシティー —『天の原』歌をめぐって—

2012 年度国文学科秋季講演会は、11 月 14 日に作家の辻原登先生をお迎えしておこなわれました。辻原先生は『村の名前』が第 103 回芥川賞を受賞して以来活動をつづけ、芸術選奨文部科学大臣賞や、司馬遼太郎賞など多くの賞を受賞するなどのご活躍をされており、現代においてもっとも重要な作家のひとりです。

今回の講演では、「歴史と冒険のシンクロニシティー—『天の原』歌をめぐって—」と題し、日本語のルーツと、その流れのなかに存在する阿倍仲麻呂の「天の原……」の歌についてお話しいただきました。今我々が日常的に使っている日本語が、世界に例を見ない特異な過程・方法で成り立ってきたという話から始まり、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」という歌を詠んだときの阿倍仲麻呂の心の裡はどのようなものだったのか。辻原先生がかつて『翔べ麒麟』という作品のなかで書いたことがあるというこの題材に、さらに 2004 年に中国で発見された、奈良時代の日本人留学生の墓誌という新たな要素を加えた内容で、私た

ちがこれまで中学校、高校で教えられてきたこの歌の解釈のほかに存在しうる、新たな可能性を開拓するものでした。これまで私たちが教えられてきたのは、日本に帰ろうとするも途中で船が難破し、結局帰ることができずに唐（現在の中国）でその生涯を閉じた阿倍仲麻呂の一生をふまえた、「悲歌」としての「天の原」歌でした。しかし、辻原先生はその歌が歌われたときはまだ船が難破する前で、これから帰る日本への憧憬と、今後の期待に満ちた展望を詠った「天の原」歌、あるいは、2004 年に発見された

留学生の墓誌をふまえて、ともに唐へ来て、そしてそのまま唐で亡くなってしまった友へ贈った「鎮魂歌」としての「天の原」歌という、ふたつの可能性を呈示なされました。その、想像力に満ちたご講演は、まるで一つの新たな物語が紡ぎだされたかのようでもあり、我々を当時の唐にいたかのような感覚にさせてくれました。

今回のご講演は、まさに題のとおり、現代と千年前とがシンクロした、素晴らしいものでした。辻原先生、本当にありがとうございました。

国文学科 2 年 原 康浩



傍聴者で満員となった会場

講師紹介



辻原 登(つじはら のぼる)

作家。1945 年、和歌山県生まれ。会社員を経て、1990 年、「村の名前」で第 103 回芥川賞を受賞。その後、第 50 回読売文学賞（『飛べ麒麟』）、第 36 回谷崎潤一郎賞（『遊動亭円木』）を受賞。近年では、2011 年、芸術選奨文部科学大臣賞（『闇の奥』）、2012 年、第 15 回司馬遼太郎賞（『韃靼の馬』）を受賞されるなど、今日、最も活躍している作家の一人。リアリズムに根ざした文体で綴られるロマンが高い評価を得ている。この 6 月には紫綬褒章を受章。また 2001 年から 2010 年まで、東海大学文学部文芸創作学科教授を勤めた。近作は『父、断章』（新潮社）。現在、神奈川近代文学館館長。

講演会だより

英文学科・英文学会共催講演会

英文学科・英文学会共催後期講演会

中村安希先生

「世界を歩く」

2012年12月5日（水）、
 本学2号館において、英文
 学会・英文学科共催秋季講演
 会が開催されました。講師に
 は、ノンフィクションライ
 ター、そしてバックパッカー
 として世界を旅している中村
 安希さんをお招きし、“世界
 を歩く”という演題で講演し
 ていただきました。



講演会の様子

いくつもの世界を旅してきた中村さんの講演は、中村さん独特の視点で進められています。日本から世界を見る、というだけではなく、世界から見た日本、そのように物事を見て思ったことや感じたことをもとにした話はとても興味深いものでした。

たとえば、世界ではバナナをスープにして食べたり、バーベキューの具材にしてし

まったりする国がありますが、それに対して日本人は“おかしい”と思うことでしょうか。しかし海外の人の視点で見ると「日本人はなぜ腐った豆を食べるのか」、となります。これもまた“おかしい”のです。

このように、日本という国を客観的に見た中村さんの話に聴講者たちは引き込まれていきました。それと同時に、世界を知ることは自分たちの国を知ることにもつながる、ということを教えてくれました。

また、中村さんはメディアを通して報道

される世界の国々と実際の国々は違う、ということも仰っていました。特にパキスタンという国については、メディアの影響を受けてしまい、歩いている人みながテロリストだ、と誤解してしまっている人もいると聞きました。しかし実際はまったく違って、道を歩いていけば「お茶をしないか」と声をかけてくれたりと、気さくな人が多いということでした。中でもパキスタンの人たちが仲良く笑いながら写っていた写真はとても印象的でした。

今回の講演を通して、世界を知るには自ら進んで行きたい国へ行き、実際に“世界を歩く”ということが何より大切なことだと気づかされました。これからの人生できっと役に立つ貴重なお話をしていただいた中村さんには大変感謝しております。ありがとうございました。

英文学科1年 相澤雄介

講師紹介



中村安希(なかむら あき)

1979年京都府生まれ、三重県育ち。
 カリフォルニア大学アーバイン校、舞台芸術学部卒業。

国内外にて写真展、講演会をする傍ら、世界各地の生活、食糧、衛生環境を取材中。

講演会だより

社会学科・地域社会学会共催講演会

2012 年度後期社会学科・地域社会学会共催講演会

早川信夫先生

「子どもたちに伝えたいニュース」



講演会の様子

昨年12月19日(水)18時10分から、社会学科・地域社会学会共催の講演会「子どもたちに伝えたいニュース」が開催された。講師は、人気番組だった「週刊こどもニュース」の立ち上げ・製作に携わったNHK解説主幹の早川信夫氏。

「メディアの中で何を伝えるべきか、30年悩んでいる」としながら、まず、週刊こどもニュースの立ち上げについての経験を語った。「視聴率で、打倒、紅白!」を謳っていたという。当時の紅白の視聴率は40%くらい。一方、こどもニュースは、当初こそ3%程度だったが、そのうち2桁台をコンスタントに稼ぐようになった。この番組の隠された意図は、「今さら恥ずかしくて質問できない」という大人たちをターゲットにしていた、という。

知らないことをわからないまま過ごすことは楽しくない。「例えばゼネコン汚職問題というのが立て続けにおこったことがあります、みなさん「ゼネコン」という言葉の意味を知っていますか」と会場に質問を投げかける。案の上、会場からは正解がで

てこない。「ゼネコンというのは General Contractor の略。総合請負業者という意味です。これを知っていると知らないのでは、ニュースの理解が全く異なり、知っていると楽しくなる」とのこと。

子ども目線でニュースをつくってきたが、子どもたちにわかってもらうのは「やさしいことば」を使うということではない。「わからない」が「わかる」の入り口となる。ちょっと難しいことがわかる、ということが楽しい」ということを仕掛けたようだ。

また記者が現場に何度も行くことの重要性にふれ、1994年の松本サリン事件に係るある新人記者のエピソードを紹介した。あまり戦力にならないと思っていたが、その記者は地道に夜遅くまで約

200軒の家を訪ね、どこで被害者がたか地図にマッピングした。それはガスの拡散を示す貴重な情報をもたらしたという。「ひとつの視点を持つことによって誰も知らない情報を獲得できた」。

専門的教育問題では「教えているとわからないと言えなくなることは気をつけて」や、東日本大震災の被災者を力づけること(忘れないで語り継いでいくこと、記憶の伝承が大切)などにもふれる盛りだくさんの講演だった。聴講者は約50名。質疑応答も活発に行われた。

講師紹介



早川信夫(はやかわ のぶお)

1953年福島県生まれ。東大経済学部卒。NHKの教育・文化担当の解説委員。解説番組「時論公論」やおはよう日本「おはようコラム」、スタジオパークからこんにちは「暮らしの中のニュース解説」などの番組で、教育問題のエキスパートとして活躍中。

早川解説委員の教育コラム。

<http://www.nhk.or.jp/school-blog/500/>

講演会だより

比較文化学科主催講演会

比較文化学会では、2012年12月5日に北村皆雄さんによる講演会「映画『ほかいびと』監督と語ろう、映像民俗学」を催しました。また、2013年1月23日に越智道雄さんをお招きし、「SF映画とアメリカ社会」と題した講演会をおこないました。映画を切り口にした両講演会から、作り手の視点と自主独立を重んじるアメリカの歴史をそれぞれ学ぶことができました。

比較文化学会会長・比較文化学科准教授 山本芳美

映画『ほかいびと』 監督と語ろう、映像民俗学

北村皆雄さんの講演会を聴いた学生たちの感想シートからの抜粋です。

「長野県伊那の井上井月を通して、初めて映像民俗学に触れたが、伊那の雰囲気・空気・井月の姿、人々の生活が明確に感じられ、五感を使って民俗を捉えることは必要不可欠だと感じた（比文1年）。『映画製作費捻出の仕組みなどの裏話も聞け、参加してよかった』（比文1年）。『今撮ったものが、50年後には民俗資料になる』という言葉に感銘を受けた」（比文1年）。『留学生として、私は自国の文化を知らないまま他国の文化を勉強している。それが良いことなのかどうか、考えさせられた』（比文2年）など、たくさんの声が寄せられました。

SF映画とアメリカ社会

『SF映画の新しい見方』

サイエンスフィクション！なんと気持ち踊るワードであろうか。それを学内のポスターで見かけた時から絶対に講演に行こうと心に決めていた。アメリカのSF映画というとやっぱり宇宙人である。問答無用に人間を焼き払う宇宙人もいれば、人間社会にとけ込もうと努力する宇宙人、はたまた特攻一発で墜ちる都市サイズのUFOを持ってくる宇宙人もいる。そうした宇宙人はアメリカにとっての仮想敵のメタファーであると越智道雄先生は指摘されている。アメリカはインディアン、ソ連、ベトナムと多くの戦争を経て、そのたびに仮想敵をつくってきた。つまりアメリカは「仮想敵症候群」という病気にかかっているのである。しかしその病氣こそがア



講演の様子

メリカの力強さの源でもあるのだ。そう考えるとアメリカにとっての次なる仮想敵は中国（アメリカ国債の4分の1を保有しており、まさにアメリカの急所を掴んでいる状態）となるのだろうか。次のハリウッドのSF映画に出てくる宇宙人は、人間の弱点を握ったような設定なのかもしれない…。ちなみに僕は「エイリアン2」のあのアメリカンなノリがたまらない。

社会学科（現・社3年）沖野敬祐

「漫画家志望。現在は集英社にて担当がつき掲載に向け奮闘中」

講師紹介



北村皆雄（きたむら みなお）

1942年生まれ。映像作家、ヴィジュアルフォークロア代表。早稲田大学第一文学部卒業と同時に記録映画、TVドキュメンタリーの監督として活動。

越智道雄（おち みちお）

1936年生まれ。明治大学名誉教授。日本ペンクラブ理事、日本オーストラリア文学会理事、日本オーストラリア学会などを歴任。翻訳家として、日本翻訳家協会出版文化賞、産経児童文学賞（翻訳部門）などを受賞。



講演会だより

ジェンダー研究プログラム講演会

ジェンダー研究プログラム講演会

米田佐代子先生

「わたし」を生きるということ

—ジェンダー視点から読み直す日本のデモクラシー—



講演会の様子

2012 年 11 月 14 日、「らいてうの家」館長の米田佐代子さんをお招きして、講演会が開かれた。ジェンダー論の大御所はもっと怖い人かなと思っていたら、話のどこにおいても常にユーモアを忘れない、日本人離れした話術の持ち主であった。そして「ジェンダーの視点から歴史を見る」という難しい話を、ご自分の人生と重ね合わせながら、短い時間の中で実に楽しそうに話して行かれた。私（黒崎）もその話に魅了されてしまい、帰ってからさっそく先生の本とらいてうの本を 1 冊ずつ注文したほどである（講演会に来ることができなかった人は「女たちが戦争に向き合うとき わたし・記憶・平和の選択」[ケイ・アイ・メディア]というパンフレットをおすすめしたい）。私のゼミの男子学生も参加していたので、どう思ったのか、以下に感想を書いてもらった。

（社会学科 准教授 黒崎 剛）

世界フォーラムの「男女平等度」の国際比較では、135 개국中日本は 101 位であり、日本における女性の「経済的指標」の低さや「政治参加」が少ないことが、日本がこの

順位にある原因とされている。では、「経済的指標」や「政治参加」を高めると良いことがあるのか考えてみたい。

米田先生の専門分野は明治大正期の女性運動家の平塚らいてう研究である。平塚らいてうは「母性主義」を唱えた。らいてうの思想の特徴は『母性＝いのちを産む性』である女性の「いのちを殺してはいけない」という生活実感と、「国家が自国の利益を固執することをやめ、どこの国も軍備をもたない」という平和構想とのむすびつきにあります。（『満月の夜の森で まだ知らないらいてうに出会う旅』 米田佐代子 2012 年 戸倉書院 46 頁より）と米田先生の著作で説明なされている。

「いのちを産む性」という言い方は女性らしさを押しつ

けるものでないかという批判がなされるかもしれない。だが「いのちを産む」という生活実感は男性である自分自身にはないものだ。自分も母親からお腹を痛めて、いのちを産んでもらった。生命の誕生を知る性である女性だからこそ、「いのちを捨てる」戦争や「身体や精神も疲れ尽くす」労働状況を批判できる。女性がいちを産む性であるからこそその政策や考え方が社会に反映されるのではないかという期待がある。私は、女性の社会参加は「すべてのいのち」を大切にす世界になるための力として必要であり、それは良いことであると思う。

（社会学科現代社会専攻 3 年

浅井 優）

講師紹介

米田佐代子（よねだ さよこ）

東京生まれ。東京都立大学人文学部（史学専攻）卒業後、同大学助手を経て山梨県立女子短期大学教授、2000 年 3 月定年退職。

専攻は日本近現代女性史。平塚らいてうを中心に近代日本の女性運動と女性思想を研究。女性学、ジェンダー論、男女共同参画問題等も手がける。実生活では共働きで二人の子を育て、保育所運動や PTA 活動にも参加。

現在、NPO 平塚らいてうの会会長兼「らいてうの家」館長。2007 年より「信州上田観光大使」。



文大だより

平成 24 年度都留文科大学公開講座

「よみ聞かせから^{どくしょ}読書の楽しさを iPad 紙芝居、
国語教科書と読み聞かせの連携」

都留文科大学情報センター講師 日向良和
(ひなた よしかず)



平成 24 年度大学公開講座の一つとして、都留市の学童保育にて「よみ聞かせから読書(どくしょ)の楽しさを」を市内 4 カ所(盛里、東桂、宝、三吉)約 140 名の児童におこないました。

昨年度より小学校で新しい「学習指導要領」が完全実施されました。新しい学習指導要領では、「言語活動の充実」として、小学校低

学年で「よみ聞かせ」や「ブックトーク」(本の紹介)をおこないます。また、新しい教科書では単元に関連した多くの絵本や児童書、図鑑が紹介されています。

今回のプログラムは、大型絵本として「はらぺこおおかみとぶたのまち」(宮西達也著)、iPad を使った電子紙芝居「ももたろう」、そして小学校二年生国語教科書に紹

介されている地域の昔話として、北海道のアイヌに伝わる神話「カムイチカプ」のよみ聞かせをおこないました。子どもたちは、大型絵本ではオオカミの滑稽な姿に笑い、iPad を操作して物語を伝える楽しさを学び、アイヌの昔話では静かに物語に入っていました。

電子紙芝居「ももたろう」は iPad の操作で画面の桃太郎が動いたり音が出たりします。一度よみ聞かせをした後、子どもたちに話しの流れに沿ってキャラクターを操作してもらいました。子どもたちはその場面の内容を効果的に伝えるためにはどんな操作をしたらいいかを考えながら、キャラクターを大きくしたり動かししたりしていました。

来年度以降も同様の公開講座で、新しい読み聞かせの形を示していきたいと考えています。末筆ながら、都留市教育委員会、盛里・東桂・宝・三吉地区の学童保育の関係各位にはご協力をいただき感謝申し上げます。



電子紙芝居「桃太郎」(右下の iPad に表示)

文大名画座 ～名画の上映とトーク第10弾～

本学教員を広く市民の皆様を紹介するとともに、教員自身がおすすめの映画を紹介し、そのエピソードや解説を行った後、その映画を上映する文大名画座を、平成 18 年度から地域貢献活動の一環として実施しています。今年度は第 1 弾として 12 月に「英国王のスピーチ」を、第 2 弾として 2 月に「はやぶさ／HAYABUSA」を上映いたしました。

第 1 弾の「英国王のスピーチ」は、12 月 13 日に 2 号館 101 教室において上映しました。

本作品は、2010 年、イギリス・オーストラリア合作の作品で、第 83 回アカデミー賞作品賞の受賞ほか、主要 4 部門を受賞した 2011 年の話題作です。コリン・ファースが、エリザベス女王の父にして国民から慕われたイギリス国王ジョージ 6 世を演じてアカデミー賞主演男優賞を獲得した感動の伝記ドラマです。吃音症に悩みながらも妻エリザベスの愛とスピーチ・セラピストのサポートで歴史的演説を成し遂げ、国民のリーダーとして戦争という難局に

立ち向かう姿を描き出したものです。

第 1 弾の上映では、英文学科の鷺直仁教授が、映画上映前に本作品の主人公やその時代背景などの解説を行いました。本学学生を始め、都留市民など約 70 名が鑑賞しましたが、上映後のアンケートでは、「上映前に資料付の解説があつて良かった」、「この映画の時代背景を学びたくなった」、「日本語字幕での上映だったので英語のリスニング力向上にもつながった」などの感想が寄せられました。時代的・文化的背景などを味わいながら感動してもらえたり、学ぶことに関心を持っていただいたり、大学ならではの上映会になっ

文大だより

第1回つる白熱教室

志茂田景樹 ～ここに響く、語りかけ～
読み聞かせ&いじめについての講演会

主催：都留文科大学サークル Trinity
後援：都留市、公立大学法人都留文科大学

平成 25 年 1 月 25 日、直木賞作家の志茂田景樹さんをお迎えし、講演会を開催いたしました。

開催にあたっては、地域の方々と交えた実行委員会を組織し、地域の方々に大学に親しんで頂けるよう、毎回のミーティングの場や、当日の会場を学内に設けさせて頂きました。

当日は雪も溶けきらず、足場の悪い中にもかかわらず、250 人以上の方々がご来場下さり、昨今注目されている、いじめをはじめとする教育問題への意識の高さを伺うことができました。また、今回は未就学児や小中学生のみなさんも会場に足を運んでくださり、絵本の読み聞かせにも注目が集まりました。志茂田さんはユニークなマイクパフォーマンスや登場人物になりきった語り口調で、会場全体を物語の世界に入り込ませて下さいました。講演会後に行ったアンケートにも、「こんなにも読み聞かせが、子供のみならず、大人にも感動を与えるものだと思わなかった。」や、「これから積極的に読み聞かせ活動を行っていききたい」など、志茂田さんの読み聞かせに予想以上の反響を頂きました。

教員養成系の大学である都留文科大学において、志茂田さんとともに教育問題や読み聞かせ活動について考えることができたこと

は、大変、意義のあることだったと感じております。後日、志茂田さんのブログ上で「都留文科大学の学生たちに、僕は夢をもらった、有難う」と今回の講演会を評価して頂くことができました。

先の話になりますが、4 月 26 日には政治的に中立の立場を貫き、若者と選挙を結びつける活動をしている原田健介さんをお迎えし、さらにパワーアップした『つる白熱教室』を行う予定ですので、そちらもぜひご期待ください。

最後になりましたが、遠路遥々都留にお越し下さった志茂田景樹さん、並びにお力添えくださりました、地元の皆様、都留市役所の皆様、大学の皆様に厚く御礼申し上げます。

実行委員長 宗野幸紀（そうの・ゆき）

志茂田景樹さんブログ：

<http://plaza.rakuten.co.jp/odata325juk/diary/201301260000/>

講師紹介



志茂田景樹(しもだ かげき)

作家・タレント

1940 年 3 月 25 日生まれ、静岡県出身、中央大学法学部卒業。1976 年 9 月、「やっこ探偵」が小説現代新人賞を受賞、作家活動をスタートさせる。1980 年 7 月、「黄色い牙」で直木賞受賞。その後、作家活動のほかにも、タレント活動、ファッションモデル、教育講演などで活躍。1999 年 8 月、「よいこに読み聞かせ隊」を結成し、隊長になる。自ら絵本・児童書を執筆し、ボランティアメンバーとともに全国で活動を行っている。

たように感じました。

また、第 2 弾の「はやぶさ／HAYABUSA」は、2 月 16 日に 2 号館 101 教室において上映しました。本作品は、「地球を旅立ち、月以外の天体からサンプルを持ち帰るという世界初の壮大なミッションを成功させるべく打ち上げられ、幾多の困難に直面しながらも 7 年の歳月を経た 2010 年 6 月 13 日、ついに地球への奇跡の帰還を果たした小惑星探査機くは

やぶさ」が辿る感動の軌跡を、最後まで諦めずにプロジェクトを成功へと導いた人々の奮闘の日々と共に描いた実録ドラマ」です。

第 2 弾の上映では、初等教育学科の平野耕一准教授が、映画上映前に本作品の背景などの解説を行いました。宇宙という難しいテーマを、ご専門（宇宙物理学）の見地から分かりやすく解説し、鑑賞された市民の方々も宇宙や科学に興味を持っていただけたものと思

います。こちらも、大学ならではの上映会であったように感じました。



第 1 弾「英国王のスピーチ」上映の様子

文大だより

卒業演奏会を終えて

初等教育学科 音楽専攻4年 森 麗実

私たち音楽専攻生にとって大学生活の集大成である卒業演奏会を、素晴らしい舞台で無事に終えることができたこと、いままで私たちに音楽を教えてくれた先生方に感謝しています。私は一年生の頃から「うぐいすホール」という大きな舞台で演奏する先輩方の背中を見てきました。4年間の努力と思いが込められた演奏を聴くと胸が熱くなり、私も同じ舞台で先輩方のような演奏をしたいと強く思うようになりました。しかし、いよいよその日が近づいてきた2日前の大ホールでの初練習では、今まで間違えずに歌えていたフレーズの歌詞が全く出てこなくなるということが何度かあり、その時初めて自分が思っている以上に「うぐいすホール」の舞台に緊張していることに気づき、少し怖くなりました。ただ今回ほど音楽と向き合ったことはなく、後悔することのないくらい努力してきたことを思うと、「自分の費やした時間を信じればいいだけだ、必ずうまくいく」という気持ちが沸き起こりました。本番直前のステージ袖でも、同じように大きな不安に襲われそうになりましたが、「今までの成果を発揮できますように！楽しんで歌えますように！」と祈りながら一步を踏み出すと、

緊張とリラックスが程よく調和した良い状態で演奏することができました。

また仲間たちの演奏を聴いていると、「こんなにもひとつのことに打ち込んで、泣いて笑って、支え合いながら、自分の音楽を創り表現できることは本当に素晴らしいことだ」と、誇らしく思いました。

入学当時、不安とホームシックで泣きながら実家の母に電話をしたこともありました。はたして、自分が大学生活をきちんとやっていくことができるのか、また音楽専攻として4年間やっていけるのだろうかと思ったことが何度もありました。くじけそうになった時、もう自分はだめかもしれないと思った時に私を支えてくれたのは、仲間でした。専攻生の友達に泣きながら不安な気持ちを相談した

時に、普段厳しいその彼女は優しく話を聞いてくれ、私に必要な言葉をくれました。それが私の不安を拭い去らせ、自分の可能性を信じてみよう、気持ちを变化させてくれた瞬間でした。それからはレッスンが楽しくなり、歌に対してポジティブに向き合うことが出来たのではないかと思います。

私たち音楽専攻生は、本当に強い絆で結ばれ、助け合いながら、あの大きなステージに立つことができました。4年間あきらめずにここまで来ることができたことを、心から良かったと思っています。音楽を通してかけがえないものを得ることができた……。私は音楽専攻を選択し、その一員となることができて本当に良かったです。ありがとうございました。



卒業演奏会を終えて うぐいすホールにて

文大だより

卒業制作展を終えて

美術専攻立休ゼミ 4 年 森 一平

私たちが所属する初等教育学科美術専攻では、2月5日（火）～2月11日（月）の7日間、コミュニケーションホール・アートシアターにて卒業制作展を開催しました。お陰様で大勢の方々にご来場いただき、大成功という形で会期を終えることができました。

我々は今回の制作展を迎えるまで1年間という期間をかけて準備を行ってきました。しかしこの1年は、制作だけでなく卒業論文・教員採用試験、・就職活動・進学に向けての準備を並行して行わなくてはならない、とても忙しい日々でした。しかし、この様な状況の中でも我々は、制作することの喜びを忘れることはありませんでした。美術専攻に所属してから今日に至るまでの中で学んだ知識と技術を振り返り、「何を作りたいのか」、「何を表現したいのか」を、一人ひとりが考えて少しずつ制作の手を進めて行きました。

卒業制作展に出展した作品にたどり着くまで、誰もが皆、何度も壁にぶつかり失敗を重ねてきました。新たな技法にチャレンジする者、陶器のテストピースをつくり焼きあがりの色を細かく調べる者、割れてしまった皿を納得がいくまでつくり続ける者、描いて

いた絵を塗りつぶしてもう一度描き始める者。それぞれが、もがき苦しみながら作品と対話をするように、試行錯誤を行っていました。その結果やっとの思いで完成した作品は、それぞれの「個性」が十分に発揮された作品であると感じています。しかし、誰もが自分一人の力でここまでたどり着けたとは思えません。ゼミ室で仲間と長い時間を共有してきたことにより、深い信頼関係が築かれ、互いに刺激し合いながら共に成長することができたと思います。

今回の卒業制作展は、私たちにとって初めて教室外の方々にご作品を見ていただく機会でした。これまで先輩方の卒業制作展の準備を手伝ってきたため、雰囲気は何となく掴んでいたものの、いざ自分たちの番となると「展示効果的」といったことまでも意識するようになり、照明や額縁・フレームなど様々な工夫が必要でした。実際にコミュニケーションホールに展示してみると、美術研究棟で見ていた作品とは全く違うように感じました。

卒業制作展には、たくさんの方々にご来場頂きました。率直なところ、初めは自分の作品を来場者の皆様に見て頂くことを恥ずかしく感じたり、もっと良い作品をつくれ



先生・仲間との記念写真
(卒業制作展会場にて)

たのではないかと悔しくも思いました。しかし、アンケートや感想ノートに書いていただいた温かいお言葉に、今後も制作を続けたい！という思いを、強くもちました。

作品・将来・論文と、様々な不安やプレッシャーを感じながら過ごしたこの1年は、あったと言う間に過ぎて行きました。しかしその分、仲間と過ごした時間はとても密度の濃いものであり、今後の私たちにとって、かけがえのない思い出となりました。

そして、無事に会期を終えることができたのも、これまでご指導に当たっていただいた先生方、本展にご来場してくださった学校関係者や地域住民の方々、快く手伝ってくれた後輩の皆さんのおかげであると感じております。文末ながら、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

編集後記

二つの大事な記事

鳥原正敏

現在、本学の学報（本誌）は年 3 回発行されている。中でも、年度末 3 月発行の学報編集作業は、大学案内の編集と並行して行われるため多忙を極める。また、御寄稿頂く方々にも大学センター入学試験、新学期の準備とお忙しい時期に、無理なお願いをしなければならず心苦しいかぎりである。さて、この 3 月発行の学報には、二つの大切な記事として「卒業論文・研究論文・修士論文一覧」と「さよなら文大」が掲載される。

「卒業論文・研究論文・修士論文一覧」は、学生の皆さんにとって成果の発信であると同時に、教員にとっても指導・成果の記録であり、とても大切な記事である。私がこの委員会に所属した当初、国文学科の高橋宏幸教授（現在本学名誉教授）から「学報は大学の公式記録である」とのお話があった。以来、できる限り正確な内容となるよう努めてきた。その中でも「卒業論文・研究論文・修士論文一覧」は、我々委員が最も神経を使う記事であり、関係の方々にはご苦勞をおかけしている。学生諸君にとっては、掲載されるのは題目と氏名のみではあるが、卒業・修了に際して今一度自身の学生生活と向き合い、気持ちを新たにそれぞれの新たな世界へ旅立って頂きたいと願う。

そしてもう一つの大切な記事「さよなら文大」では、ご退職される先生の御挨拶を掲載している。本年度もそれぞれの御事情で、多くの先生方が退職される。本委員会の中でも、楠元六男教授が定年でご退職される。大変さみしいことではあるが、おめでたいことでもある。

ご退職される先生方には、これまでの御協力に対して深く感謝申し上げたいと思う。また御定年を迎えられた先生方には、心よりお祝い申し上げたい。

文末ながら年度末号の発行に際して、本年度も学報をご愛読頂いた皆様と編集に御協力頂いた方々に、担当委員を代表して厚く御礼を申し上げたい。



本誌の編集風景

新しい『第一クラブ棟』が完成！

(平成 25 年 2 月 12 日 竣工式)

従来のクラブ棟が老朽化したため、部・サークルなどの学生活動等を支援するため、新たに鉄骨 2 階建ての第一クラブ棟を建設しました。

施設の概要： 鉄骨造 2 階建、
建築面積 726 m²、準耐火
建築物、部屋数 46、トレー
ニングルーム、フリース
ペース、教員控室、倉庫、
シャワー室、トイレなど

